

法律実務と人工知能

目次、序文、14部



金京鎮

Japanese PDF edition

法律実務と人工知能

金京鎮

金京鎮AI書房のオンライン書籍。法律リサーチ、書面作成、証拠分析、契約レビュー、NotebookLM、生成AIの実務ワークフローを法律実務の視点で整理します。

目次

序文

第1部 AI時代の核心

第2部 AIを正しく活用するための5つの核心原則

第3部 AIはGPUベースで、視覚能力が非常に高い

第4部 人工知能活用TOP 10

第5部 録音、文字起こし、AIの活用

第6部 法律事務所のためのLLMプロジェクト完全ガイド

第7部 弁護士の契約助言業務におけるAI活用

第8部 AI生成物のファクトチェック

第9部 LLMが提供するディープリサーチ機能

第10部 Google検索URLとYouTube検索URLをAIに作らせる

第11部 NotebookLMとGrabbitによる大規模法律資料分析

第12部 プロンプト作成が難しく感じるとき

第13部 その他知っておくと便利な使い方

第14部 図解とAIインフォグラフィック

序文

全章を見る

次の章 →

はじめに

法律家のデスクの上に、新しい同僚が座った。

2024年前後を境に、大規模言語モデル（LLM）はもはやテクノロジー業界だけの話題ではなくなった。医療、金融、教育を問わず、あらゆる産業がAIとの共存を模索しており、法律分野も例外ではない。膨大なテキストを扱い、論理的な推論と精密な言語表現が生命線である法律業務こそ、LLMが最も強力な力を発揮できる領域である。

現実には甘くない。多くの弁護士が、具体的にどこからどう始めればよいのか途方に暮れている。判例検索に使ってみるか、訴状のドラフトを任せてみるか、契約書の検討に活用できるだろうか。あるいは、AIが生成した結果を果たして信頼できるのか。いわゆる「ハルシネーション（Hallucination：幻覚）」の問題をどう管理すべきか。依頼人の秘密は守られるのか。これらの問いを前に、多くの法律家が第一歩を踏み出せずにいる。

本書は、まさにその第一歩のために書かれた。筆者は30余年の実務経験に基づき、AIが法律業務の各段階で実際にどのような助けとなり得るのかを体系的に整理した。リーガルリサーチにおける判例や法令の検索・分析方法、民事・刑事・行政訴訟の書面のドラフト作成と論証構造の設計技法、数百ページに及ぶ証拠資料から核心となる事実関係を抽出し矛盾点を発見する戦略、契約書のリスク条項を特定し修正案を導き出すプロセス、そしてM&Aのデューデリジェンスやコンプライアンスチェックに至るまで、弁護士実務のほぼすべての局面を網羅している。

本書が強調するのは二点である。第一に、AIは弁護士に取って代わるものではなく、増強（augment）するツールであるという点だ。LLMが生成したすべての成果物は、必ず弁護士の専門的判断を経なければならず、最終責任は常に人間にある。第二に、実務ですぐに使える具体的なプロンプトとワークフローを提示している点だ。理論的な可能性ではなく、明日からすぐにオフィスで適用できる実践的なマニュアルを目指した。

録音ファイルを文字起こしして法律書面の根拠として活用する方法、大量のPDF証拠を一つのファイルに結合してAIに効率的に入力する技法、NotebookLMとClaude・ChatGPTを連携させて数百ページの事件記録を処理する協業プロセスまで、現場で直面する実質的な困難に対する解決策を盛り込んだ。

法律AIの時代はすでに始まっている。本書が同僚の法律家たちにとって、信頼できるガイドブックとなることを願っている。

全章を見る

次の章 →

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第1部 AI時代の核心

← 前の章

全章を見る

次の章 →

1. AI、スマートフォン、コンピュータ / テキスト入力と音声入力がそれぞれ可能、誰でもアクセス可能

AIはもはや特別な人だけが使う技術ではありません。コンピュータ、タブレット、スマートフォンなど、私たちがすでに持っている機器さえあれば、誰でもすぐに使用できます。ここで強調する核心は「一般の人でも簡単にAI機能を使用できる」という点です。

わずか5年前まで、AIを使用するにはPythonのようなプログラミング言語を学ぶ必要があり、GPUサーバーを構築しなければならず、複雑なコマンド体系を理解する必要がありました。一般人が近づくにはあまりにも高い壁でした。しかし、2022年末にChatGPTが登場したことで、状況は完全に変わりました。

今ではカカオトークでメッセージを送るように、対話ウィンドウに日本語で「今日の夕食のメニューを推薦して」と入力すれば、AIが親切に答えてくれます。これがなぜ革命的なのかと言えば、技術の民主化が成し遂げられたからです。例えば、1990年代にインターネットが初めて登場した時は、モデムを設置し、複雑な接続手順を経る必要がありました。

しかし今は、Wi-Fiに接続するだけで終わりです。AIも同じ過程をたどっています。複雑な技術的障壁が消え、「言葉を掛けるだけでいい」時代が来たのです。

特に注目すべき点は、音声でもAIにアクセスできるということです。キーボード入力が不便な高齢者や、運転中の人、手が離せない状況でも、「Siri」や「Hey Google」のように音声でAIと対話できます。ChatGPTアプリでも音声対話機能がすでに提供されており、Claudeも音声モードをサポートしています。

実生活の例を挙げてみましょう。70代の方がスマートフォンでClaudeアプリを開き、マイクボタンを押した後に「うちの孫が小学校3年生なんだけど、誕生日プレゼントに何がいいかな？」と言えば、AIが年齢に合ったプレゼントの推薦をしてくれます。

レゴセットから科学実験キット、人気の児童書まで具体的に教えてくれます。コンピュータに詳しくない方も、スマートフォン一つで世界最高水準のAI秘書を持てる時代です。また、接続機器の多様性は場所の制約もなくすことを意味します。

自宅ではデスクトップコンピュータの広い画面でAIと一緒に報告書を書き、移動中はスマートフォンで簡単な質問をし、カフェではタブレットでAIと一緒に勉強することができます。AIがいつでもどこでも自分の隣にいる助手になったわけです。

2. 多様なAIプラットフォーム

現在使用可能な複数のAIサービスの実際の画面が一目でわかります。ChatGPT、Claude、Gemini、Copilotなど、多様なAIチャットボットのインターフェースが並んでいます。これはAIサービスが一つだけあるのではなく、選択肢が豊富であることを示しています。

これを私たちに馴染みのあるものに例えると、ポータルサイトと同じです。日本で検索する際、GoogleだけでなくYahoo! やBingなど複数の選択肢があります。

同様にAIチャットボットも、複数の会社がそれぞれの強みを持つサービスを提供しています。主要なAIプラットフォームの特徴を見てみましょう。ChatGPTはOpenAIが作ったサービスで、対話型AIの元祖的存在です。

最も早く大衆化され、ユーザーが最も多いです。日常的な会話、執筆、コーディング、画像生成まで幅広くサポートします。ClaudeはAnthropicが作ったサービスで、長い文書を分析したり、精巧な文章を書いたりすることに特に長けています。

200ページのPDFを丸ごとアップロードして「この契約書の中でわが社に不利な条項を見つけて」と言えば、正確に見つけ出します。GeminiはGoogleが作ったサービスで、Google検索、Gmail、Googleドライブと自然に連動します。「Googleドライブから先月の議事録を探して要約して」といった作業が可能です。

重要なのは、これらすべてのサービスの使用方法が本質的に同じであるという点です。対話ウィンドウがあり、そこに自分が望むことを自然言語（日常の言葉）で入力すればAIが回答します。カカオトークやLINEを使える人なら誰でもAIを使えます。

一つのAIを使えるようになれば、他もすぐに習得できますが、これはAndroidスマートフォンからiPhoneに変えても基本原理は同じであるのと同じです。実際、複数のAIを状況に合わせて使い分けするのが良いでしょう。例えば、素早い情報検索が必要な時はGeminiを、長い報告書の作成が必要な時はClaudeを、画像生成が必要な時はChatGPTを使用するといった具合です。

これは鉛筆、ボールペン、万年筆を状況に合わせて選んで使うのと似ています。簡単なプロンプトの例を見てみましょう。どのAIでも、このように入力すればいいのです。

「私は50代の会社員ですが、退勤後の30分以内にできる運動ルーチンを教えて。膝が良くないので、膝に負担がかからないものでお願いします。」この一つの質問をChatGPT、Claude、Geminiにそれぞれ入れてみると、少しずつ異なるスタイルの回答を受け取ることができ、その中から気に入ったものを選択すればよいのです。

3. LLMは自然言語処理（NLP）の核心

この内容はAIの技術的背景を説明する部分です。LLM（Large Language Model、巨大言語モデル）が自然言語処理（NLP、Natural Language Processing）の核心であるということですが、これらの用語が難しく感じられるかもしれないので、一つずつ紐解いてみましょう。まず「自然言語」とは何でしょうか？

自然言語は、私たちが毎日使う言葉です。「今日の昼食は何を食べようか？」「この書類は明日までに提出しなければならない」「雨が降りそうだから傘を持っていきなさい」といった韓国語、英

語、日本語など、人間が自然に使用するすべての言語が自然言語です。

反対の概念は「プログラミング言語」で、これは人間がコンピュータのために人為的に作った言語です。「自然言語処理（NLP）」は、コンピュータがこの人間の言葉を理解し、分析し、自ら作り出す技術です。以前から自然言語処理技術はありました。

スマートフォンの自動翻訳機や、スパムメールのフィルタリングが代表的です。しかし、性能はあまり高くありませんでした。Google翻訳に韓国語を入れると不自然な英語が出てきた時代を覚えている方も多いでしょう。

ところがLLMが登場したことで、自然言語処理の水準が飛躍的に向上しました。LLMは文字通り「巨大な言語モデル」です。「巨大だ」ということには2つの意味があります。

第一に、学習したデータの量が膨大です。インターネット上にある数十億個のウェブページ、数百万冊の本、論文、ニュース記事、Wikipediaなどを丸ごと学習しました。第二に、モデルのサイズ（パラメータ）がとてつもなく大きいです。

GPT-4は数千億個のパラメータを持っていますが、これは脳の神経接続のように、単語と単語の関係性を記憶する繋がりが数千億個あるという意味です。比喻を挙げてみましょう。かつての自然言語処理AIが「英韓辞典」だったなら、LLMは「韓国に30年住んで韓国文化まで完璧に理解した外国人」のようなものです。

英韓辞典は「How are you?」を「どのようにいますか?」と直訳しますが、韓国生活30年目の外国人は「元気?」

」と自然に翻訳します。さらに「ご飯食べた?」が実際には挨拶であることを理解します。

LLMがこれほど優れている理由は、学習方式にあります。LLMは「次に来る単語を予測する」訓練を繰り返します。「今日の天気は本当に___」という文章で、空欄に何が来るかを予測する練習を数兆回繰り返したのです。

この過程で文法、文脈、常識、論理、感情表現まで自然に学習することになります。プロンプトの例でLLMの自然言語理解力を直接確認できます。「次の文章の隠された意味を分析して：『部長が今日の会議で君の報告書を褒めていたよ。』」

でも、ちょっと長いとおっしゃっていたけれど。』」このように入力すれば、AIは単純な翻訳ではなく、「表向きは褒めているが、報告書を短くしろという間接的なフィードバック」という文脈まで把握して説明してくれます。これがまさにLLMベースの自然言語処理の力です。

4. 人工知能は世界中の知識を持ち、思考までする

この内容の核となるメッセージは非常に強烈です。「人工知能は世界中の知識を持っていると考えていいでしょう。」そして、3つの核心能力を01、02、03の番号で提示しています。

一番目（01）は「多様で複雑な質問に答える能力」です。AIは医学、法律、科学、歴史、文学、料理、スポーツなど、ほぼすべての分野の知識を持っています。単に知っているというレベルではな

く、各分野の専門家レベルの知識を保有しています。

例えば「大腸がんステージ3の患者の一般的な治療オプションを説明して」と聞けば、手術、抗がん剤治療、放射線治療などの選択肢を医学的な根拠と共に説明してくれます。もちろん実際の医療判断は医師に任せるべきですが、患者が自分の状況を理解する上で大きな助けになります。二番目（02）は「LLMが言語の意味と文脈を理解し学習する能力」です。

AIは単にデータを検索するのではなく、質問の意図を把握し、文脈に合った回答を生成します。「謝る」という言葉が「果物のリンゴ（韓国語で同じ発音）」なのか「許しを請う謝罪」なのかを文脈から正確に判断します。「チーム長に謝罪するメールを書いて」と言えば、果物の話をすることはありません。

三番目（03）は「新しいものを生成し、分類し、要約するなどの多様な作業が可能である」ということです。AIは単に既存の情報を持ってくるだけでなく、新しい文章を書き、コードを組み、データを分析し、画像を作ることができます。プロンプトの例を通じて、これら3つの能力を一度に体験することができます。

「高血圧に良い献立を一週間分立てて（知識）、各メニューを選択した医学的根拠を説明して（文脈理解）。そして、これを冷蔵庫に貼れるように表にまとめて（生成）。」この一つの質問に、AIは3つの能力をすべて動員して答えます。

世界の医学知識を活用し、質問者の要求を文脈的に理解し、新しい形態（表）でコンテンツを生成するのです。

5. AIは制作でも活用される

この内容は、AIが単なる情報伝達ツールではなく、実際に何かを「作り出す」ツールであるという点を強調しています。核となるメッセージは「情報の伝達だけではない、魅力を理解して答えを出すことができ、むしろなかったものを作り出す」というものです。これはAIに対する最大の誤解を正す内容です。

多くの人々がAIを「検索エンジンのアップグレード版」程度に考えています。NAVERやGoogleで検索すれば既存のウェブページを探してくれるように、AIも既にある情報を持ってくるのだと誤解しているのです。しかし、AIはそれをはるかに超えています。

AIの制作能力は大きく二つに分かれます。一つは「頭が良いから何でもできる」ということであり、もう一つは「頭が良いことを活用して多様な機能に拡張される」ということです。一番目を具体的に見てみましょう。

AIに「近所のパン屋さんの宣伝ポスターのキャッチコピーを作って」と言えば、世界のどこにもなかった新しいコピーを作り出します。「毎朝焼き上がる幸せ、あなたの一日を温かく」といったコピーを生成します。これはどこからか書き写したのではなく、AIが学習した言語パターンを基に新しく創作したものです。

二番目に、この創作能力は多様な分野に拡張されます。執筆ではありません。コードを書いてウェブサイトを作ることができ、Excelデータを分析してグラフを描くことができ、音楽を作曲でき、

映像シナリオを書くことができます。

実際のプロンプトの例です。「私は伝統市場でトッポギ店を営んでいるよ。Instagramにアップする宣伝文5つと、店のメニュー表に使う感性的な紹介文を一つ作って。

」AIはこのリクエストを受けると、伝統市場の雰囲気、トッポギの魅力、Instagramユーザーの特性、メニュー表の役割などを総合的に考慮して、完全に新しいコンテンツを作り出します。これが「なかったものを作り出す」AIの真の力です。「今週の水曜日にチームの飲み会があるけれど、出席案内のメールを作成して。

場所は江南駅近くの韓牛専門店で、時間は夜7時。出席の可否を火曜日までに返信してほしいという内容も盛り込んで。」こうすればAIは、ビジネスメールの適切なトーンと形式を備えた、世界に一つだけのメールを作り出します。

6. AIの核心 — 情報伝達を超えた文脈理解と創造

この内容はAIの3つの次元をより明確に区分しています。「情報の伝達だけではない。文脈を理解して答えを出すことができる。

むしろなかったものを作り出す。」そして、二つの観点を提示しています。「頭が良いから何でもできる」と「頭が良いことを活用して多様な機能に拡張される」という観点です。

これを人間に例えると理解が簡単です。単純な情報伝達は「百科事典」です。「ソウルの人口は約950万人です」のように事実を教えることです。

検索エンジンが行っているのがこれです。文脈理解は「経験豊富なカウンセラー」です。「最近、会社でストレスをたくさん受けている。

退職すべきかな？」という質問に、単に「退職率の統計」を教えるのではなく、「どのような点が辛いのですか？業務過多ですか、人間関係の問題ですか？

」と文脈を把握しながら会話を続けます。創造は「優れた秘書兼作家兼デザイナー」です。「明日、投資家ミーティングがあるから発表資料を作って」と言えば、これまでにない完全に新しいプレゼンテーション内容を構成してくれます。

「頭が良いから何でもできる」という観点は、AIの汎用知能を意味します。一つのAIが法律相談も行い、料理のレシピも教え、コーディングも行い、詩も書けるという意味です。人間に例えれば、弁護士でありながら料理人でありながらプログラマーでありながら詩人である人のようなものですが、現実では不可能でもAIはこれが可能です。

「頭が良いことを活用して多様な機能に拡張される」という観点は、AIが他のツールと結合すれば能力が幾何級数的に大きくなるという意味です。AI単独でも強力ですが、インターネット検索と結合すれば最新情報まで把握し、Excelと結合すればデータ分析を行い、画像生成ツールと結合すれば絵を描き、メールと結合すれば自動的にメールを送ります。プロンプトの例を挙げてみましょう。

「私が運営しているカフェの先月の売上データを分析して（文脈理解）、最も売れているメニュー上位5つを教えて（情報伝達）、今月のプロモーション企画案を作成して（創造）。」一つのリクエストの中に情報伝達、文脈理解、創造がすべて入っており、AIはこれら3つを同時に処理します。

7. AIが役立つ8つの分野

ここではAIが活用される主な分野を8つのカテゴリーに整理しています。1番 文学、2番 自然科学、3番 芸術および教育、4番 通信およびコンピューティング、5番 旅行および観光、6番 医学および健康、7番 地域および活動場所、8番 その他に分かれています。この分類が示す核心メッセージは「AIは特定の分野だけに使うのではなく、人間の生活のほぼすべての領域で活用可能である」ということです。各分野を具体的に見てみましょう。

1. 文学分野でAIは執筆の強力なパートナーです。小説のプロットを構想したり、詩を書い

たり、エッセイの下書きを作成したり、翻訳をしたり、文法を校正したりする仕事をします。「私が書いた自己紹介書をより印象的に整えて」と言えば、すぐに改善案を提示します。

2. 自然科学分野でAIは科学的概念の説明、実験データの分析、研究論文の検討などを助けま

す。「光合成の原理を中学生が理解できるように説明して」と言えば、レベルに合わせて説明してくれます。

3. 芸術および教育分野は、AIの創造能力が最も輝く領域です。画像生成、作曲、

教育カリキュラムの設計、クイズ制作などが可能です。

4. 通信およびコンピューティング分野でAIはコード作成、システム設計、ネットワーク問題の解決などを助けま

す。プログラミングを知らない人も「簡単な家計簿アプリを作って」と言えば、実際に動作するコードを受け取ることができます。

5. 旅行および観光分野でAIはカスタマイズされた旅行計画を立ててくれます。「70代の

両親と一緒に3泊4日の濟州島旅行の計画を立てて。あまり歩かないコースでお願い」と言えば、詳細な日程表を作ってくれます。

6. 医学および健康分野でAIは健康情報の提供、症状分析、運動ルーチンの設計、食事管理などを

助けます。もちろん専門的な医療判断に代わることはできませんが、健康管理の優れたガイドになります。

7. 地域および活動場所では、美味しい店（グルメ）の推薦、文化施設の案内、地域のイベント情報などを提供します。

8. その他に分類された領域は、上記のカテゴリーに含まれない無限の可能性を意味します。

プロンプトの例です。「今週末に釜山でできるアクティビティを推薦して。朝は健康的な運動（健康）、昼はグルメ探索（地域）、午後は美術館鑑賞（芸術）、夜は読書会で発表する本の要約（文学）を助けて。」一つのリクエストで8つの分野のうち4つを同時に活用することが可能です。

8. ビジネス＆金融分野でAIが代替する専門家の役割

最後にビジネスと金融分野でAIが遂行できる具体的な専門家の役割を列挙します。投資アナリスト、経営コンサルタント、マーケティング専門家、金融専門家、データサイエンティスト、トレンド分析家などが提示されています。これが意味するところは重大です。

過去にはこうした専門家を雇用するには、月に数十万円から数百万円の費用がかかりました。大企業でもなければ不可能なことでした。しかし今やAIを通じて、個人事業主や小規模事業者もこうした専門家級のサービスを受けられるようになりました。

各役割を具体的に見てみましょう。投資アナリストの役割でAIは、企業の財務諸表を分析し、産業動向を把握し、投資判断に必要な情報を整理してくれます。もちろん最終的な投資決定は自分で行わなければなりませんが、分析過程を大幅に短縮させます。

経営コンサルタントの役割でAIは、事業計画書の作成、SWOT分析、競合他社分析、市場参入戦略の樹立などを助けます。マッキンゼーに数千万円払って任せていた仕事の相当部分をAIがこなしてくれます。マーケティング専門家の役割でAIは、ターゲット顧客の分析、広告コピーの作成、SNSコンテンツの企画、電子メールマーケティング戦略の樹立などを遂行します。

金融専門家の役割でAIは、ローン条件の比較、保険商品の分析、節税戦略などに関する情報を提供します。データサイエンティストの役割でAIは、ExcelやCSVデータを分析し、パターンを見つけ、視覚化し、予測モデルを提案します。トレンド分析家の役割でAIは、最新の市場トレンド、消費者行動の変化、技術発展の方向性などを分析します。

プロンプトの例です。「私は東京で小さなカフェを運営しているよ。経営コンサルタントのようにうちのカフェのSWOT分析をして、マーケティング専門家のようにInstagramのマーケティング戦略を立てて、トレンド分析家のように2026年のカフェ業界のトレンドを教えて。

」この一つのプロンプトで、経営コンサルタント、マーケティング専門家、トレンド分析家の三人をお得に雇用した効果を得ることができます。月額3千円程度のAI購読料で、数百万円分のコンサルティングを受けるようなものです。これがAI時代の最大の機会であり、特に自営業者や1人企業にとってゲームチェンジャーとなる理由です。

← 前の章

全章を見る

次の章 →

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

第2部 AIを正しく活用するための5つの核心原則

← 前の章

全章を見る

次の章 →

1. 人工知能は間違えることがある

この一文は、AIを使用するすべての人が必ず心に刻むべき大原則です。AIがどんなに賢く見えても、どんなに自信に満ちた口調で答えても、間違えることがあります。これを専門用語で「ハルシネーション（Hallucination、幻覚）」と呼びます。

AIがまるで事実であるかのように、もっともらしい嘘の情報を作り出す現象です。なぜこのようなことが起こるのでしょうか？ AIの作動原理を理解すれば納得がいきます。

AIは「次にくる確率が最も高い単語」を繋げて文章を作ります。これは「正解を知っていること」とは異なります。比喩的に言えば、AIは試験を受けるとき、正解を確実に知っている学生ではなく、数万冊の本を読んだ後で「この問題の答えはこれである可能性が高いだろう」と推論する学生に近いです。

ほとんどの場合は正解ですが、時には自信に満ちた表情で間違った答えを書くこともあります。具体的な事例を挙げてみましょう。AIに「金九（キム・グ）先生の著書リストを教えて」と尋ねると、実際に存在する『白凡逸志』と共に、存在しない本のタイトルをもっともらしく捏造して教えることがあります。

「『私の祖国』（1945年）」のような、ありそうなタイトルを作り出すのです。AIはこれを嘘をつこうという意図で行っているわけではありません。パターン上、「金九」という人物と「独立運動」「祖国」という単語が頻繁に繋がるため、もっともらしい組み合わせを作り出したのです。

法律分野では、この問題が特に深刻になる可能性があります。例えば「最高裁2020ダ12345判決の要旨を教えて」と尋ねると、AIが実際に存在しない判例をあたかも実在するかのように詳細に説明することがあります。事件番号、裁判部、判決要旨まで完璧に作り上げます。

米国では実際に、弁護士がChatGPTが作り出した偽の判例を裁判所に提出し、懲戒処分を受けた事件がありました。医学情報でも同様です。「この薬とあの薬を一緒に飲んでも大丈夫ですか？

」という質問に、AIが「はい、大丈夫です」と自信を持って答えましたが、実際には深刻な薬物相互作用がある場合があります。それならAIを一切使うべきではないのでしょうか？ 決してそうではありません。

核心は、AIの回答を「出発点」としつつ、「終着点」にしないことです。AIが教えてくれた情報を基にもう一度確認する習慣をつければいいのです。これはインターネットの検索結果を無条件に信じないのと同じ原理です。

プロンプトの例として、AIの正確度を高める方法があります。「大韓民国の個人情報保護法における敏感情報の定義を教えて。正確な条文番号と共に教え、あなたが確実ではない部分は『確認が必要』と表示して。

」このように「確実でなければ表示してほしい」とリクエストすると、AIが自身の不確実性を表示してくれるケースが増え、エラーを事前にフィルタリングすることができます。

2. 間違っている、量と質において人間の作業より速く効率的である

二番目の原則は、一番目の原則と対をなす非常に重要な観点です。「はい、AIは間違えることがあります。しかし、それでも人間が直接行うよりはるかに速く効率的です。

」この二つを同時に理解してこそ、AIを正しく活用できます。例えば、弁護士が100ページの契約書を検討しなければならないとしましょう。人間が直接読みながら問題のある条項を探すには、少なくとも半日、丁寧に行えば一日かかります。

しかし、AIにこの契約書を渡し、「乙に不利な条項をすべて探し、リスクを上・中・下に分類して」と言えば、2～3分で結果が出ます。AIが見つけた20個の問題条項のうち2～3個が間違っていたとしても、残りの17～18個は正確です。人間が最初から100ページをすべて読むより、AIが絞り込んでくれた20個を人間が検証の方が圧倒的に速いです。

これを数値で考えてみましょう。人間が100ページを直接検討すると8時間かかり、正確度が90%だとします（人間も疲労のために見落とす部分があるからです）。AIにまず任せて人間が検証すれば、計1時間で済み、正確度は95%になります。

時間は8分の1に短縮され、正確度はむしろ向上するのです。人間も間違えるからです。特に人間は疲れるとミスが増えますが、AIは午前3時でも正午と同じパフォーマンスを発揮します。

文章作成でも同様です。新聞のコラムの草案を作成するとしましょう。白紙の状態から1,800字のコラムを書くには、通常3～4時間はかかります。

資料調査、構成、草案作成、推敲まで含めると丸一日かかることもあります。しかし、AIに「最近のEU AI Actの核心内容を中心に、韓国のAI基本法と比較するコラムの草案を書いて」と言えば、1分以内に草案が出てきます。この草案は完璧ではありません。

表現が不自然な部分もあり、事実関係を確認すべき部分もあります。しかし、この草案を基に修正するのは30分もあれば十分です。全体の作業時間が4時間から30分に短縮されるのです。

翻訳作業はさらに劇的です。英文の論文30ページを韓国語に翻訳するには、専門の翻訳家でも2～3日かかります。AIは5分以内に全体を翻訳します。

翻訳の品質が80～90%の水準だとしても、専門家がこれを整えるのに半日あれば十分です。3日の作業が半日に短縮されるのです。核心的なプロンプトの例です。

「次の英文契約書を韓国語に翻訳して。法律用語は大韓民国の法律用語の慣行に合わせて翻訳し、翻訳が曖昧な部分は原文を括弧書きで併記して。」このようにすれば、AIの翻訳結果を人間が検証

するのがはるかに容易になります。

3. 批判的な観点からファクトチェックを行わなければならない

三番目の原則は、一番目と二番目の原則の自然な結論です。AIは間違える可能性があるので（1番）、速く結果を受け取りつつ（2番）、必ず批判的に検証しなければならない（3番）ということです。「批判的な観点」とは何でしょうか？

これはAIを疑えという意味ではありません。AIの回答を受け取ったとき、「本当にそうだろうか？」ともう一度考える健康的な習慣を意味します。

まるで新聞記事を読むときに「これは事実だろうか？他のメディアではどう報じられているだろうか？」と考えるメディアリテラシーと同じ概念です。

これを「AIリテラシー」と呼ぶことができます。ファクトチェックの方法はいくつかあります。第一に、AIに出典を尋ねる方法です。

「今言った内容の出典は何？」と聞けば、AIが参考にした情報の根拠を提示します。ただし、前述の通りAIが偽の出典を作り出すこともあるため、提示された出典を実際に確認してみる過程が必要です。

第二に、クロス検証です。AIが教えてくれた情報をGoogleやNaverでもう一度検索してみることで。特に数字、日付、固有名詞、法律の条文など、正確性が重要な事実情報は必ずクロス検証しなければなりません。

第三に、AI自身に検証させる方法です。これはかなり効果的な手法です。プロンプトの例を見てみましょう。

「あなたが今作成した回答を批判的に検討して。事実関係が間違っている部分はないか、論理的に飛躍している部分はないか、根拠の弱い主張はないか点検して。」驚くべきことに、AIは自分自身の回答の中からエラーを見つけ出すことが多々あります。

これはまるで文章を書いた後、時間を置いて読み直すと誤字が見つかるのと似ています。AIに「批判者の役割」を与えると、当初は見えなかった問題点を自ら指摘します。もう一つの効果的なプロンプトの例です。

「大韓民国AI基本法の主要内容を整理して。ただし、各項目ごとに『確信度』を上・中・下で表示して。あなたが確実に知っている内容は『上』、大まかに知っている内容は『中』、推測に近い内容は『下』と表示して。

」このようにすれば、AIがどの部分で自分が不確実なのかを自ら表示してくれるので、ユーザーがどこを重点的にファクトチェックすべきかを知ることができます。ファクトチェックの核心原則を整理すると以下の通りです。数字は必ず確認します（統計、日付、金額など）。

固有名詞は必ず確認します（人物名、機関名、法律名など）。引用文は必ず確認します（AIが作り出した偽の引用である可能性があります）。最新情報は必ず確認します（AIの学習データには時間

的な限界があります)。

この四つを習慣化するだけでも、AI活用の信頼性が大きく向上します。

4. 複数の人工知能に同時に答えを求めるべきである

四番目の原則は非常に実用的なアドバイスです。一つのAIだけを使わず、複数のAIに同じ質問を同時に投げかけて回答を比較しろというものです。これは前述したファクトチェックの最も効果的な方法でもあります。

なぜ複数のAIに聞くべきなのでしょう？ 各AIは異なる会社が異なるデータで、異なる方式で訓練させたモデルです。したがって、同じ質問に対しても異なる観点の回答を出します。

これはまるで病院で「セカンドオピニオン (second opinion)」を求めるのと似ています。一人の医師の診断だけを信じず、他の医師の意見も聞いてみるということですね。具体的にどうするのか見てみましょう。

例えば「2026年の韓国不動産市場の展望」という質問をChatGPT、Claude、Gemini、Copilotの四つに同時に入力します。ChatGPTはマクロ経済指標を中心に回答するかもしれませんが、Claudeは政策的要因をより強調するかもしれません。GeminiはGoogle検索データを活用してリアルタイムのトレンドを反映でき、Copilotはマイクロソフトのデータを基に別の視点を提供できます。

四つの回答を比較すると、非常に有用な結果が得られます。四つすべてで共通して言及されている内容は信頼性が高いです。一箇所だけが言及し、残りの三つが言及していない内容は追加の確認が必要です。

互いに相反する意見が出た場合、その主題について専門家の間でも意見が分かれているというシグナルなので、より深く調査する必要があります。実用的な活用法を紹介します。ブラウザでChatGPT、Claude、Gemini、Copilotのタブを同時に開いておき、同じ質問をコピーして四箇所に貼り付けます。

1~2分以内に四つの回答をすべて受け取ることができます。そして四つの回答を比較しながら、最も正確で有用な情報を選び出します。さらに高度な活用法もあります。

一つのAIの回答を別のAIに検証させるのです。プロンプトの例です。「次は別のAIが作成した『EU AI Actの要約』だよ。

この内容の中に事実関係が間違っている部分があるか検討して。[別のAIの回答を貼り付け]」このようにすればAI同士でお互いをクロス検証することになり、一つのAIのハルシネーションを別のAIが捉えることができます。これは論文審査で査読 (peer review) を行うのと同じ原理です。

時間がないときは、最低でも二つのAIに聞いてみる習慣をつけると良いでしょう。特に重要な意思決定 (投資、法律、健康など) に関する質問であれば、必ず複数のAIを活用すべきです。一つのAIの回答だけで重大な決定を下すのは、一つの新聞記事だけを読んで世界を判断するのと同じです。

5. 有料利用を強く推奨する (4つ使っても12万ウォンだ)

五番目の原則は最も現実的で直接的なアドバイスです。AIを正しく活用するには有料版を使いということであり、その費用が思ったより安価だということです。主要なAIサービス4つをすべて有料で購読しても、月12万ウォン程度にしかありません。

まず無料版と有料版の違いを理解する必要があります。無料版はAIの真の実力を見せてくれません。これはまるで車の試乗で駐車場を一周するようなものです。

高速道路で走ってみてこそその車の真価がわかるように、AIも有料版を使ってみてこそ、本当に何ができるのかがわかります。具体的にどのような違いがあるのでしょうか？ 第一に、使用できるAIモデルの性能自体が違います。

第二に、使用量制限が違います。無料版は一日に送信できるメッセージ数が制限されており、複雑な作業をしているとすぐに上限に達します。「しばらくしてからもう一度お試しください」というメッセージが表示されると作業の流れが途切れ、効率が大きく低下します。

第三に、付加機能の違いです。有料版ではファイルのアップロード（PDF、エクセル、画像など）、画像生成、ウェブ検索、コード実行、音声会話などの核心的な機能を自由に使用できます。無料版ではこれらの機能が制限されるか、あるいは全くありません。

次に、費用対効果を計算してみましょう。ChatGPT Plusが月20ドル（約2.7万ウォン）、Claude Proが月20ドル（約2.

7万ウォン）、Gemini Advancedが月19,900ウォン、Copilot Proが月20ドル（約2.7万ウォン）です。四つすべてを購読すると約10～12万ウォン程度です。

AIの有料購読12万ウォンで、これらすべての専門家の役割を24時間365日受けられるなら、これは費用ではなく投資です。特に会社員なら、AIが節約してくれる時間を換算してみればわかります。一日に1時間だけ節約されたとしても、月20日勤務基準で20時間です。

時給2万ウォンで換算すれば40万ウォン分の時間を節約することになり、12万ウォンの投資で40万ウォンの時間価値を得るのです。自営業者にはさらに劇的です。店舗の宣伝文句、SNSコンテンツ、顧客対応マニュアル、事業計画書、税金関連の質問などをすべてAIに任せることができるので、別途スタッフを雇用したり外部業者に依頼したりする必要性が大きく減ります。

プロンプトの例として、有料版でのみ可能な高度な活用法です。「添付したPDFファイル（100ページの事業報告書）を分析して、この会社の財務健全性を評価し、投資時の注意点5つを教えて。」このような作業は長い文書を処理しなければならないため、無料版では不可能か、あるいは非常に限定的です。

有料版でようやくAIの真の力を体験できます。月12万ウォンは、AI時代を生きていくために必要な、最もコストパフォーマンスの高い自己投資です。

← 前の章

全章を見る

次の章 →

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第3部 AIはGPUベースで、視覚能力が非常に高い

← 前の章

全章を見る

次の章 →

第3部 AIはGPUベース / 視覚能力が非常に高い

1. AIの目はGPUから生まれた

人工知能の視覚能力は、GPU（グラフィックス・プロセッシング・ユニット）ハードウェアをベースに発展してきました。AI研究の初期において、最も代表的なトレーニングがまさに「犬と猫の写真を区別すること」でした。数百万枚の画像をGPUで繰り返し学習させることで、AIは形態、色、パターン、質感などの視覚的特徴を自ら把握する能力を養いました。この視覚トレーニングがAI発展の出発点であったため、今日のAIは非常に「目」が良いのです。写真、絵画、文書画像、手書き、医療用画像など、ほぼすべての視覚資料を高い精度で認識・分析することができます。AIがテキストだけでなく画像分野でも強力な理由は、その出自自体が「見るトレーニング」から始まったためです。

2. 人工知能OCR機能活用ガイド

OCRとは「Optical Character Recognition」、すなわち光学文字認識のことです。簡単に言えば、写真やスキャン画像の中の文字を、コンピュータが読み取れるテキストに変換する技術です。この内容は、AIがこのOCR機能をいかに革新的に発展させたかを示すガイドです。

まず、なぜOCRが必要なのかを理解しましょう。私たちの身の回りには「写真としてのみ存在する文字」が膨大にあります。紙の書類をスキャンしたPDF、スマートフォンで撮った名刺、ホワイトボードに書いた会議の内容、古い本の写真、外国のレストランのメニュー、手書きのメモなどがすべてこれに該当します。

こうした画像の中の文字は、コピーしたり、検索したり、編集したりすることができません。ただの「画像」に過ぎないからです。かつてのOCRは、性能がかなり劣っていました。

きれいに印刷された文書はそれなりに認識できましたが、手書き文字、斜めに撮られた写真、しわの寄った書類、多言語が混ざった文書などは認識率が非常に低かったのです。「キム・ギョンジン」を「キム・ギョンジャン」と、「契約書」を「ケヨクソ」と認識するといった具合でした。しかし、AIベースのOCRは次元が違います。

AIは単に文字の形を認識するのではなく、文脈を理解します。文字が少しぼやけていても、「この文章の文脈上、この単語は『契約書』で間違いないだろう」と判断します。手書き文字も高い精度で認識し、韓国語、英語、日本語、中国語が混ざった文書も、各言語を区別して処理します。

実生活での活用事例を挙げてみましょう。弁護士が古い判決文のスキャンデータを受け取ったとします。20年前の判決文で、紙が黄色く変色し、文字がかすれています。

これをAI OCRにかけると、テキストに変換されます。変換されたテキストは検索が可能で、コピーして意見書に引用したり、他の判決文と比較分析したりすることができます。事業者であれば、取引先からファックスで送られてきた注文書（いまだにファックスを使っているところがあります！）

をスマートフォンで撮ってAIに送れば、注文内容をテキストに変換し、エクセル表にまとめてくれます。旅行中も便利です。外国のレストランで現地語のメニューを写真に撮ってAIに送れば、文字を認識して日本語に翻訳してくれます。

プロンプトの例です。「この画像にあるすべてのテキストを読み取って整理して。表形式があれば表を維持し、手書き部分はできるだけ正確に認識して。」

読み取りにくい部分は[不明]と表示して。」「この名刺の写真から名前、役職、電話番号、メールアドレスを抽出して、連絡先形式で整理して。」

3. 手書きメモ — AIに読み取られるアナログ

この内容は、手書きの個人的なメモを示しています。丁寧に手書きされた旅行のメモや日常の記録と思われ、これはAI OCR活用の実際の事例を示すものです。この手書きメモがここに登場した理由は明確です。

前述したAI OCR機能の実践的な活用対象を示すためです。「こうした手書き文字もAIが読み取ることができる」ということを直接証明しているのです。私たちの日常には、手書きの文字が依然として数多く存在します。

会議中に急いで書いたメモ、講義ノート、診療記録、お年寄りの手紙、古い日記帳などがすべて手書きです。こうした資料は、それ自体では検索ができず、他人と共有することも難しく、体系的に整理することも困難です。しかし、AIにこの手書き写真を見せると、驚くべきことが起こります。

AIが文字を読み取り、テキストに変換し、さらには内容を要約したり翻訳したりすることもできます。10年分の手書きの日記帳を写真に撮ってAIに渡せば、全内容をデジタルテキストに変換し、日付順に整理し、「この期間に最も多く言及されたテーマは何か」まで分析してくれます。実務でも非常に有用です。

医師が患者のカルテに手書きしたメモを写真に撮ってAIに送れば、電子カルテに変換できますし、弁護士が法廷で急いで書いたメモをAIで整理すれば、きれいな会議録になります。プロンプトの例です。「この手書きメモの写真を読み取ってテキストに変換して。」

読み取りにくい文字は[?]と表示し、内容を段落ごとに整理して。そして核心となる内容を3行で要約して。

」「この手書きの手紙を読んで、感情的なトーン（喜び、悲しみ、心配など）を分析して。」

4. AIと共にした13カ国バックパッキング旅行 — 実戦体験記

この内容は、実際にAIを活用しながら旅行した生き生きとした体験記です。蛍光ペンで強調されたいくつかの段落が見られ、AIを旅行のパートナーとして活用した具体的な経験が記述されています。

13カ国の単独バックパッキング旅行中に、ChatGPTとClaudeを集中的に活用しながら、AIの実戦能力を直接体験した内容です。

この体験記が特別な理由があります。AIに関する説明の多くは「理論」や「可能性」に留まります。「AIでこんなこともあんなこともできます」といった具合です。

しかし、この内容は実際にやってみた人の体験談です。理論ではなく実戦です。バックパッキング旅行は、AI活用の最高のテストの場です。

なぜなら、予測不可能な状況が絶えず発生するからです。宿泊予約がキャンセルされ、列車を逃し、メニューが読めず、道に迷い、現地の役所で書類を作成しなければならないなど、さまざまな問題が発生します。こうしたリアルタイムの問題解決に、AIがいかに有用であるかを直接経験したのです。

例えば、外国で急にお腹を壊したとしましょう。現地の薬局に行って症状を説明しなければなりません。英語がうまく通じません。この時、AIに「お腹が痛くて下痢をしている」。

トルコの薬局で薬を買う時に、英語とトルコ語で何と言えればいいか教えて。あと、韓国でよく飲む正露丸のような薬の現地の名前も教えて」と言えば、すぐに助けを得ることができます。レストランでメニューの写真を撮ってAIに送れば、各料理の説明とともに「この中で韓国人の口に合うもの」まで推薦してくれます。

現地の公共交通機関の利用法、観光地の入場料と営業時間、現地のチップ文化など、旅行者に必要なすべての情報をリアルタイムで得ることができます。最も印象的なのは、この旅行体験が結局、AI専門家への転換点になったという事実です。単に「AIを使ってみた」ではなく、極限の実戦状況でAIの可能性と限界を同時に体験し、この経験をもとに他の人々にAIを教える専門家になったのです。

理論書を100冊読むよりも、13カ国の旅行でAIを直接使ってみた経験の方が価値があるのです。プロンプトの例です。「私は今ポルトガルリスボンにいる。

明日、シントラ（Sintra）に日帰り旅行に行こうと思っている。リスボンからシントラまでの列車の時刻表、シントラでの半日コースのおすすめ、ランチの美味しい店、そして夜までにリスボンに戻るスケジュールを立てて。」「このレストランのメニューの写真を見て、各料理を日本語で説明して。

海鮮アレルギーがあるから、海鮮が入ったメニューは別に表示して。」

5. 欧州の建築物の前で — AI画像分析実習

欧州の華やかな建築物（オペラハウスまたは劇場と思われる建物）の前で撮影された旅行写真です。この写真はAI画像分析の実戦練習の対象です。AIにこの写真を見せて「この建物はどこか、建築様式は何か、いつ建てられたのか」を尋ねると、AIが視覚的な手がかり（建築様式、彫刻、柱の形など）を分析して建物を特定し、関連情報を提供します。旅行中に撮った写真をAIに見せて「この場所について教えて」と言えば、現地ガイドの役割を果たしてくれます。「この写真に写っている建物の名前、場所、建築様式、歴史的背景を教えて。」

6. 街並みの写真 — AI画像認識と状況分析

海外の街角で撮影された日常の風景写真です。この写真は、AIに画像を見せてさまざまな分析を依頼する実習対象です。AIは写真の中の街の雰囲気、看板、交通標識、建築スタイルなどを総合的に分析して撮影場所を推定し、現地の文化や状況を説明することができます。また、写真の中のテキスト（看板、標識など）をOCRで読み取って翻訳する練習にも活用できます。「この写真がどの国、どの都市で撮られたものか推定し、根拠を説明して。」

7. 外国語のメニュー表 — AI翻訳の実戦

海外のレストランのメニュー表の写真です。現地語で書かれたメニュー表は、海外旅行者にとって最も一般的な言語の壁の一つです。AIにこの写真を見せれば、各メニューの名前、価格、材料の説明を日本語に翻訳してくれます。単なる翻訳を超えて「この料理はどんな味か」「日本のどんな料理に似ているか」「アレルギーの原因成分があるか」まで尋ねることができ、AIが現地レストランでの個人通訳者の役割を果たします。「このメニュー表を日本語に翻訳し、各料理の特徴とおすすめメニューを教えて。」

[← 前の章](#)

[全章を見る](#)

[次の章 →](#)

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第4部 人工知能活用TOP 10

← 前の章

全章を見る

次の章 →

第4部 人工知能活用 TOP 10

人工知能の活用範囲は、大きく6つの核となる領域に分けることができます。1つ目は「ASK-ANSWER」、すなわち質問と回答です。事実関係の確認、意見の要請、助言など、気になることを尋ねればAIが即座に答えてくれます。

「この契約条項は民法何条に該当する？」といった専門的な質問も可能です。2つ目は、世界中のあらゆる言語間の翻訳と通訳です。

韓国語をスワヒリ語に、アラビア語を日本語に変える作業が数秒で終わります。3つ目は文章作成で、報告書、メール、コラム、小説まで、あらゆる種類の文章をAIと共に作成できます。4つ目は、あらゆる知識に対する学習ツールの役割です。

AIが個人家庭教師のように、レベルに合わせて説明してくれます。5つ目は情報の要約で、100ページの報告書を核となる3行に圧縮してくれます。6つ目は創作アイデアの提供で、ビジネスアイデアからデザインコンセプトまで、ブレインストーミングのパートナーになります。

この内容は、AIを日常で具体的にどのような用途で活用できるかをリストで示しています。旅行日程の設計、メモおよび記録の設計、昨日の出来事を未来叙述方式に変えること、将来の自分自身の貢献方法の探索、1日でプログラミングを作る方法、画像関連の作業などが羅列されています。このリストが重要な理由は、AI活用を「大それたもの」とだけ考える誤解を解くためです。

多くの人がAIといえば、自動運転車やロボットのようなすごいものばかりを思い浮かべます。しかし、実際にAIが最大の価値を発揮するのは、私たちの平凡な日常です。旅行日程の設計から見ていきましょう。

旅行の計画を立てることは、思ったより多くの労力がかかります。航空便の時間の確認、宿泊先の位置と観光スポットの動線の最適化、レストランの予約、現地の交通手段の把握などをすべて考慮しなければなりません。AIに条件を伝えれば、これらすべてを総合した最適な日程を作成してくれます。

「3泊4日の大阪旅行の計画を立てて。60代の両親と一緒に行くのだけれど、1日の歩行距離が5kmを超えないようにして。グルメスポットは地元の人がよく行く場所を推薦して、各場所の間の移動時間も含めて。」

「昨日の出来事を未来叙述方式に変えるのは、興味深い活用法です。これは日記や回顧録を書くとき、あるいは自己紹介書やエッセイを書くときに視点を転換する技法です。例えば、「昨日プレゼンテーションをしたが、緊張して失敗した」という過去の経験を、「次のプレゼンテーションで、

私は十分に準備し、自信を持って発表するだろう」と未来志向に転換できます。

これは心理学で言う「ポジティブ・リフレーミング (positive reframing)」という技法でもあります。「次の内容は昨日の出来事だ。これを未来の視点から『私はこうするつもりだ』という方式で書き直して。

ポジティブで発展的なトーンでお願い。[昨日の経験を入力]」1日でプログラミングを作る方法は、AI時代の最も驚くべき変化の一つです。コーディングを全く知らない人でも、AIに「このような機能を持つプログラムを作って」と言えば、実際に動作するコードを受け取ることができます。

簡単なウェブサイト、データ整理プログラム、業務自動化スクリプトなどを、プログラミングの知識なしに作ることができます。「エクセルファイルから特定の条件に合うデータだけを抽出して、新しいファイルとして保存するPythonプログラムを作って。条件は『売上高が100万ウォン以上』で『地域がソウル』のデータだ。

」画像関連の作業は、AIの視覚的能力を画像関連の作業は、AIの視覚的能力を活用するものです。写真編集、画像生成、写真の中のテキスト認識、画像分析などが含まれます。ブログにアップするサムネイル画像を作ったり、製品写真の背景を変えたり、古い写真を復元したりする作業をAIがやってくれます。

ハーバード・ビジネス・レビューが分析した「2025年生成型AI活用頻度TOP 10」は、これら6大領域が実際にどのように使われているかを具体的に示しています。1位は相談および対話パートナーで、情緒的なサポートと安心感を提供する仮想の友人の役割です。孤独な現代人がAIに悩みを打ち明ける時代が来たのです。

2位は日常生活の管理で、スケジュール管理、ToDoリスト、計画立案など、個人秘書の役割です。3位は「人生の目的探し」というやや哲学的な領域ですが、AIが個人の価値観や目標に合った方向性を提示します。4位の「学習能力の向上」は、カスタマイズされた教育と即時のフィードバックを通じた学習支援であり、5位の「専門家向けコード生成」はプログラミングの自動化です。

6位はアイデア生成、7位は楽しさと遊び、8位はコードの改善、9位は創造性の発揮、10位は健康的な生活という順に続きます。注目すべき点は、1位が「情報検索」や「業務効率化」ではなく、「情緒的な対話パートナー」であるという事実です。人々がAIを最も多く使う理由が孤独の解消と感情的な支えであることは、AIが単なる道具を超えて、人間の情緒的なニーズまで満たす存在へと進化していることを示しています。

← 前の章

全章を見る

次の章 →

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

第5部 録音、文字起こし、AIの活用

← 前の章

全章を見る

次の章 →

第5部 録音・録取と文字起こし文の活用

1. 録音から文字起こし文、そしてAIを活用した加工

私たちは毎日、数え切れないほどの言葉を話し、聞いています。会議、講義、インタビュー、相談、電話など、重要な内容が言葉でやり取りされますが、その多くは記憶だけに頼ったまま消えてしまいます。本節では、その問題を根本的に解決する3段階のワークフローを紹介します。

「録音、文字起こし、AI加工」という3つのステップです。最初のステップは録音です。スマートフォンやApple Watchのようなデバイスを活用し、日常の重要な会話を録音します。

iPhoneの場合、標準の「ボイスメモ」アプリだけでも十分ですし、Apple Watchを身に付けていれば手元ですぐに録音を開始できます。最新のiPhoneとApple Intelligenceを活用すれば、通話録音まで可能になりました。肝心なのは「まずは録音する習慣」をつけることです。

会議が始まれば録音ボタンを押し、講義を聴くときも録音しておき、重要な電話の内容を記録として残すのです。第2のステップは文字起こし文の作成です。現在は「CLOVA Note」や「Daglo」のような別途アプリをインストールしなくても、スマートフォン自体に文字起こし機能が内蔵されています。

Galaxy端末の場合、Galaxy AIの「テキスト変換アシスト」機能がボイスレコーダーアプリに搭載されています。テキスト変換、翻訳、要約の3つの機能を提供します。使い方は簡単です。

ボイスレコーダーアプリを起動して変換したい録音ファイルを選択し、テキスト変換ボタンを押して言語を選択するだけです。Galaxy S24シリーズ以降は、既存の録音データも時間制限なくテキスト変換が可能で、最大4人まで話者を識別して変換してくれます。通話録音も同様です。

One UI 7では、通話録音が自動的にテキストに変換され、要約される機能が追加されました。発信者と受信者を区別してテキストメッセージのように読むことができ、長い通話の場合はAIが要点をカテゴリ別に整理してくれます。日本語を含む20言語をサポートしており、テキスト変換機能はネットワーク接続なしでも動作します。

iPhoneの場合、iOS 18.1から「メモ」アプリにオーディオ文字起こし機能が導入されました。メモアプリでオーディオを録音すると、話している内容が自動的にテキストに変換されます。

文字起こし文の中の特定のテキストをタップすると、その地点からオーディオが再生され、文字起こし文内の検索も可能です。iPhone 12以降のモデルで提供され、日本語を含む10言語をサポートしています。通話録音も可能になりました。

通話中に画面上部の録音ボタンを押すと録音が始まり、録音された内容はメモアプリに保存されて文字起こしされたテキストを確認できます。ただし、録音開始時に相手に録音の事実を知らせる音声案内が自動的に再生されます。Apple Intelligenceが有効になっていれば、録音内容を要約する機能も利用できます。

ポイントは、今や別途アプリを使わなくても、GalaxyであれiPhoneであれスマートフォン単体で録音から文字起こしまで一気に完了できるということです。この段階で出力された文字起こし文は、まだ「下書き（たたき台）」のようなものです。音声認識の限界で誤字脱字があり、「えーっと」「そのー」といったフィラー（無駄口）がそのまま残っているため、読みづらいことがあります。

そこで第3のステップであるAI加工が必要になります。第3の、そして最も重要なステップがAIによる加工です。文字起こしのドラフトをChatGPTやClaudeに入力し、整理を依頼します。

AIは不要な言葉を除去し、文章を滑らかに整え、話者を区別し、トピックごとに分類します。さらに、要約、アクションアイテム（ネクストアクション）の抽出、議事録形式への変換まで可能です。元の内容は100%保持しながら、読みやすい文書へと脱皮させるのです。

このワークフローの威力は、実務において劇的に発揮されます。弁護士ならクライアントとの相談内容を録音してAIで整理すれば正確な事件記録になり、記者ならインタビュー録音をAIで整理すれば記事の下書きになり、学生なら講義の録音をAIで整理すれば完璧な講義ノートになります。最後に32番が示す「01（録音および文字起こし）、02（整理および要約、コアメッセージとクイズ作成）、03（多様なフォーマットへの変換）」の3段階プロセスは、一言も漏らさず知識として蓄積するAI時代の最も実用的な習慣です。

2. 録音文字起こし文のAI再加工による法律書類作成の実務活用

a. 文字起こし文ベースの法律文書作成ワークフロー。弁護士実務において録音資料は事件の核心を突く一次証拠であり、事実関係の出発点である。

しかし、録音の原本そのものだけでは法律書面にすぐ活用することは難しい。話者同士の会話が入り混じり、争点とは無関係な発言が混在しているため、法的に意味のある発言を抽出するには、弁護士が文字起こし文全体を繰り返し読み込まなければならない負担が伴う。この過程を人工知能が画期的に改善できる。

ワークフローは以下のように構成される。第一に、録音ファイルをSTT（Speech-to-Text）技術で文字起こしする。第二に、AIが一次整理を行い、話者を区別して核心的な内容を抽出する。

第三に、弁護士がAIの整理済みテキストを検討・補正し、法的正確性を確保する。第四に、補正された内容を目的別に活用し、書面作成、証拠分析、戦略立案などにつなげる。最後に、原本の録音ファイル、文字起こし文、AI整理済みテキストを併せて保管し、証拠としての連続性を維持する。

このワークフローで注目すべき点は、AIが弁護士に代わるのではなく、弁護士の分析と判断に必要な基礎資料を迅速に整理してくれるということである。弁護士はAIが整理した結果を法的観点から検証し、それを基に様々な法律書類の作成に即座に着手できる。 b.

訴訟書面の作成における活用。文字起こし文を基に作成できる法律書面の範囲は非常に広い。これを民事訴訟書面、刑事訴訟書面、証拠関連書面の3つの領域に分けて考察する。

1) 民事訴訟書面。訴状の作成において、文字起こし文は請求原因となる事実関係を時系列で再構成する上で核心的な役割を果たす。AIに文字起こし文を提供しながら「添付の文字起こし文から、被告が債務を認めたり弁済の意思を表示したりした発言をすべて抽出せよ」といったプロンプトを提示すれば、AIは該当する発言を時系列で整理し、各発言の法的意味（自白、債務承認、弁済約定など）を分析する。

弁護士はこれを基に「被告の債務承認」の項目に入る準備書面の本案起案を迅速に作成できる。準備書面の場合、相手方の発言の中から自白や認容部分を争点ごとにマッピングする作業が鍵となる。文字起こし文の中から相手が自ら不利益な事実を認めた箇所をAIが自動的に抽出すれば、弁護士はそれを準備書面の各争点に配置して論理構造を完成させる。

釈明準備命令に対する回答書の作成時にも、録取内容は事実関係疎明の根拠となる。裁判所が求める特定の事実について、録取書のどの部分がそれを裏付けているかをAIが整理してくれれば、回答書作成の効率が大幅に向上する。2) 刑事訴訟書面。

告訴状や告発状の作成では、犯罪構成要件に合わせて文字起こし文内の発言を再構成することが肝要である。例えば詐欺被害事件でAIに「文字起こし文から詐欺罪の構成要件別の該当発言を分類せよ」と依頼すれば、欺罔行為に該当する虚偽事実の発言、錯誤の誘発に該当する発言、処分行為に関連する送金依頼や催促の発言などが体系的に分類される。弁護士はこれを告訴状の「犯罪事実」の部分に直接活用できる。

また、AIに証拠価値の高い核心的な発言を3つ選定し、その理由を説明するよう依頼すれば、告訴状の説得力を高めるのに役立つ。弁護士意見書の作成では被疑者に有利な情状発言を整理することが重要であり、最終陳述書案の作成では被告人側の立場を裏付ける文脈を抽出するのに文字起こし文が活用される。

3. 証拠関連の書面

証拠説明書の作成時、各録取部分の立証趣旨を事実関係と結びつける作業をAIが補助する。証人尋問事項は文字起こし文内の矛盾点をベースに質問を設計でき、反対尋問の質問は相手方証人の過去の発言と不一致の部分を突く方向で構成される。特に資料と文字起こし書を基に、依頼人、証人、相手方それぞれに対して問うべき事項と尋問事項をAIに作成依頼すれば、弁護士はそれを検討・修正して、実際の法廷で活用できる尋問計画を立てることができる。

a. 証拠分析および事件戦略の立案。文字起こし文の活用は、単なる書面作成を超えて、事件戦略立案の核心的なツールへと拡張される。

1) 事実関係の整理。AIは文字起こし文から事件のタイムライン（Chronology）を自動的に生成できる。主要な人物相関図を抽出し、誰が誰に何を言ったのかを視覚的に整理し、金銭の授受、約束、脅迫など法的に意味のある行為の時点を特定する作業も可能だ。

例えば不動産売買契約に関する紛争で「3つの文字起こし文を統合して事件のタイムラインを作成せよ（日付、出来事、核心発言の形式）」と依頼すれば、契約協議の段階から契約締結、紛争発生までの全過程が一目瞭然に整理される。2) 供述の一貫性の分析。同一当事者の複数の発言間の矛盾点を発見し、時間の経過に伴う主張の変化を追跡し、相手方の書面上の主張と録取内容の不一致を照合する作業は、訴訟戦略の核心である。

AIに「被告の答弁書での3つの主張と矛盾する発言をそれぞれ探せ」と依頼すれば、例えば被告が答弁書で「原告と2024年1月以前に会ったことはない」と主張しているが、録取にはこれと矛盾する発言が存在する場合などをAIが自動的に捉え、各矛盾点に対する分析（なぜ矛盾するのかの説明）まで提供する。弁護士はこれを基に、反対尋問時に活用できる質問をさらに3つ作成するようAIに依頼できる。3) 戦略的活用。

相手方の予想される主張に対する反論論理を構成する際、録取の根拠を提示する方式で説得力を高めることができる。和解や合意の進行、あるいは訴訟継続の判断時には有利・不利の分析が必要だが、AIが「当方（買主）に有利な発言と不利な発言を区別してSWOT分析をせよ」といった要求に対して体系的な分析を提供することで、意思決定を支援する。さらに模擬法廷シミュレーションで予想質問と回答を設計する際にも、文字起こし文が核心的な資料として活用される。

4. 契約および合意に関する活用

a. 口頭合意の文書化。実務において当事者間で口頭で行われた合意は、後日の紛争の原因になりやすい。

文字起こし文から当事者間の合意内容を抽出して合意書のドラフトを作成したり、契約条件に関する口頭協議の内容を契約条項に変換したりする作業にAIを活用できる。例えば「依頼人（甲）と取引先（乙）の間でソフトウェア開発業務について口頭で合意した内容」が含まれる文字起こし文をAIに提供しながら、添付の文字起こし文から契約の主要要素（業務範囲および内容、対価の額および支払条件、納品期限、瑕疵補修責任、知的財産権の帰属など）を抽出し、抽出した内容を基に業務委託契約書の案を作成し、文字起こし文で明確に合意されておらず追加協議が必要な事項を別途整理するように依頼できる。b.

紛争解決および契約解釈。紛争時に締結当時の会話内容から当事者の意思を解釈することは、契約法の基本原理である。AIは文字起こし文から契約の意味に関する当事者の発言を抽出し、意思解釈の根拠資料を提供する。

また、催告状や通知書の送付前に相手方の発言を整理して、通知内容の正確性と説得力を高めるために活用される。

5. 依頼人とのコミュニケーションおよび事件管理

a. 相談記録の整理。依頼人の相談録音を文字起こした後、AIがこれを事実関係、要望事項、懸念事項に分類すれば、弁護士は依頼人のニーズを体系的に把握できる。

また、不足している情報を確認するための質問リストを自動的に生成し、後続の相談の効率を高める。b. 事件進行管理。

相手方との交渉の通話記録を整理し、事件進行の各過程における口頭合意事項の履歴を管理するのにもAIが活用される。例えば建設瑕疵補修紛争で相手方と3回のビデオ交渉を行った場合、AIに「3つの文字起こし文を分析して交渉経過報告書を作成せよ」と依頼しながら、各交渉日別の主要な議論内容、相手方の立場の変化の推移、現在までに合意された事項と未合意の事項、今後の交渉戦略に対する提案事項まで含めた報告書を生成できる。これを通じて依頼人に交渉結果を透明に報告し、依頼人が理解しやすいように専門用語を最小限に抑えた平易な文章で作成し、依頼人に判断を仰ぐべき事項があれば明確に表示するようにできる。

6. 結論

録音文字起こし文のAI再加工は、弁護士実務のパラダイムを変化させるツールである。単一の録音資料から、訴状、告訴状、内容証明、答弁書、仮処分申請書はもちろんのこと、証人尋問事項、反対尋問の質問、交渉報告書、契約書のドラフトに至るまで、多様な法律書類を体系的に生成できる。核心は、AIが文字起こし文の中の膨大な情報を目的に合わせて分類・抽出・再構成してくれることで、弁護士が法的判断と戦略立案という本質的な業務に集中できるようにする点にある。AIは弁護士にとって代わるものではない。AIは弁護士の分析能力を増幅させる強力なツールであり、これを効果的に活用する弁護士が、これからのリーガル市場において競争優位を確保することになるだろう。

← 前の章

全章を見る

次の章 →

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第6部 法律事務所のためのLLMプロジェクト完全ガイド

← 前の章

全章を見る

次の章 →

第6部 法律事務所のためのLLMプロジェクト活用完全ガイド

1. LLMプロジェクト機能とは何か

a. なぜプロジェクト機能が必要なのか 一般的なチャットボットの対話ウィンドウは、新しく対話を始めるたびに背景知識を説明し直さなければなりません。「この事件は賃貸借紛争で、原告は賃貸人、被告が2年間の賃料を延滞しており……」といった説明を毎回の対話で繰り返すのは非効率的です。

Claudeの「Projects」、ChatGPTの「GPTs」や「Projects」、Geminiの「Gems」、Googleの「NotebookLM」は、この問題を解決するために、あらかじめ学習（設定）された「専用の部屋」を作る機能です。核心は次の3点に集約されます。(1) 知識ベース (Knowledge): 関連法令、書面テンプレート、事件資料 (PDF、テキスト) をあらかじめアップロードしておけば、対話のたびに送り直す必要がありません。

AIは常にこれらの資料を参照した状態で回答します。(2) 固定指示 (Instruction): 「あなたは10年目の民事専門弁護士です。回答は常に『主張・立証・結論』の構造にしてください」といったルールをデフォルトとして設定できます。

毎回役割を与える手間が省けます。(3) 継続性 (Continuity): 同一プロジェクト内で対話をすれば、AIは以前にアップロードされたすべての文書の文脈を記憶した状態で回答します。事件の流れが断絶しません。

b. 弁護士実務における核心原則：事件別キャビネット 法律事務所でLLMプロジェクトを活用する最も重要な原則は、各事件や案件ごとに個別のキャビネット（プロジェクト）を作成して作業することです。物理的な事務所で事件ごとにファイルフォルダを管理するように、デジタルのAI空間でも事件ごとに独立したプロジェクトを運用することで、資料の混同を防ぎ、一貫した文脈の上で作業を行うことができます。

例えば、「2026-民事-賃貸借紛争-氏名」プロジェクト、「2026-助言-M&A-ABC企業」プロジェクトを個別に作成し、その事件に関連するすべての資料と対話をそのプロジェクト内だけで完結させます。

2. ツール別プロジェクト作成および資料アップロード方法

a. Claude (Anthropic) — 「Projects」 Claudeのプロジェクトは、論理的な文章構成力に優れており、書面の草案作成に最も適しています。(1) 作成方法: メイン画面左下の「Projects」をクリックし、「Create Project」を選択します。

プロジェクト名は「事件番号-事件類型-依頼者名」の形式にすることをお勧めします。(2) Set Instructions: プロジェクト設定で「民事訴訟事件のエキスパート」といった役割と回答構造を指定します。例:「あなたは民事訴訟専門の弁護士補助AIです。」

すべての回答は 法的争点の整理、 関連判例の分析、 戦略的意見 の順序で作成してください。日本の法律を基準に回答し、法律用語は正確に使用すること。」(3) Add Content: 右上の「Add Content」から事件記録(PDFなど)をアップロードします。

最大200MBまで可能で、テキストベースのPDFが最も効果的です。(4) 活用チップ: Claudeは長い文書の論理的分析と書面草案の作成に強みがあります。特に準備書面の主張・反論構造の作成、相手方の主張の論理的弱点の分析に卓越しています。

b. ChatGPT (OpenAI) — 「GPTs」または「Projects」汎用的なリサーチと多様なプラグイン連携に強みがあります。(1) 作成方法: 「Explore GPTs」から「Create」をクリックします。

または、最近追加された「Projects」機能を活用することもできます。(2) Configure: 「Knowledge」セクションに関連資料をアップロードします。「Instructions」に役割と回答方式を設定します。

(3) Capabilities: 「Code Interpreter」を有効にすると、証拠分析(金融取引明細など)が可能になります。「Web Browsing」をオンにすれば、最新の判例検索も行えます。(4) 活用チップ: ChatGPTはDALL-Eによる画像生成とコード分析機能が統合されており、事故現場の再現図の作成や金融取引データの分析に有利です。

c. Gemini (Google) — 「Gems」Googleエコシステム(Gmail、Drive、Docs)との連携が強みです。(1) 作成方法: Geminiのメイン画面で「Gem manager」をクリックし、「New Gem」を選択します。

(2) 設定: 名前、役割指示(Custom Instructions)を入力します。例:「日本の民事訴訟法に基づく訴訟手続きを基準に、弁護士の視点から事件を分析してください。」(3) 資料連携: Google Driveに保存された事件資料を直接参照できます。

Google Workspaceをすでに使用している法律事務所には特に便利です。(4) 活用チップ: GeminiはGoogle検索に基づいた最新情報へのアクセス性に優れ、マルチモーダル(画像、文書)処理が強力です。証拠写真の分析や契約書の画像からのテキスト抽出に有用です。

d. NotebookLM (Google) — 「事件別デジタルキャビネット」最も多くの資料(最大50ファイル、計50万単語)を読み込めるため、弁護士実務に最も適した知識ベースツールです。(1) 作成方法: NotebookLMサイトにアクセスし、「新しいノートブック」を作成します。

(2) ソースの追加: 左側の「ソース」ボタンを押し、PDF、Googleドライブの文書、コピーしたテキストなどをアップロードします。ウェブサイトのURLもソースとして追加できます。(3) ガイドの活用: アップロードすると即座にAIが資料全体を分析し、「事件の要約」や「タイムライン」などを自動的に提案します。

(4) 活用チップ: NotebookLMは資料に基づいた回答の正確性が最も高いのが特徴です。「この根拠がどの文書の何ページにあるか」という出典を明確に表示してくれるため、証拠資料に基づいた事実関係の確認に最適です。また、「Audio Overview（音声概要）」機能で事件のブリーフィングを音声で聴くこともできます。

3. 法律事務所における具体的な活用法

a. 訴訟事件のプロジェクト設定ワークフロー (1) プロジェクト作成: 事件を受任したら直ちに4つのツールすべてに同一の事件名でプロジェクトを作成します。各ツールの強みが異なるため、併用するのが理想的です。

(2) 資料アップロード: 訴状（または答弁書）、証拠資料、関連法令、参考判例をすべてのプロジェクトにアップロードします。この際、資料は可能な限りテキストベースのPDFで統一します。スキャン画像のPDFは、必ずOCR（文字認識）処理を済ませた状態でなければなりません。

(3) 固定指示の設定: 各プロジェクトに事件類型に合った役割と回答構造を指定します。例: 「この事件は不動産賃貸借保証金返還請求事件です。原告（賃借人）側代理人の視点で分析してください。

関連法令: 民法第618条～第654条、借地借家法。」(4) ツール別の役割分担: NotebookLMは事実関係の確認と証拠出典の追跡、タイムラインの整理に活用します。Claudeは準備書面の草案作成と法律論証の構造化、相手方の主張への反論作成に活用します。

ChatGPTは類似判例のリサーチと金融取引データの分析、図表・図式の生成に活用します。Geminiは最新判例の検索と証拠写真の分析、Googleドライブ連携文書の管理に活用します。b.

プロジェクト作成後にできること (1) 各種書面の作成: 訴状、答弁書、準備書面、告訴状、内容証明など、多様な法律書面の草案をAIに任せることができます。核心はあくまで「草案」であるという点です。AIが作成した書面は、必ず弁護士が検討・修正した上で使用しなければなりません。

プロジェクトに事件資料がすでに入っているため、「この事件の準備書面の草案を作成して。争点は 賃貸借契約の黙示の更新の有無、 保証金返還義務の範囲だ」と指示すれば、文脈に沿った草案が出力されます。(2) 各種分析書の作成: 証拠分析書（各証拠の証明力と関連性の分析）、相手方の主張の分析（論理的弱点の特定）、判例分析（類似判例の事実関係との比較分析）、法令解釈の分析などを依頼できます。

特に相手方が提出した準備書面をアップロードして「相手方の主張の弱点を分析して」と依頼すれば、論理的な矛盾や証拠不足の部分を体系的に整理してくれます。(3) 弁護士としての疑問点への質問: 事件を進める中で、特定の法律解釈や手続きについて疑問が生じることがあります。プロジェクト内で質問すれば、AIがアップロードされた事件資料の文脈を理解した状態で回答するため、一般的な検索よりもはるかに正確な回答が得られます。

「この事件で相殺の抗弁は可能か?」「消滅時効の起算点はいつと見るべきか?」といった実務的な質問に即座に回答を得られます。

(4) 依頼者向けコミュニケーション資料の生成: 事件経過報告書、依頼者説明用の要約文、法律意見書などを生成できます。「この事件の現状を依頼者が理解しやすいようにA4用紙1枚で要約して」

と依頼すれば、法律用語を噛み砕いて説明する文書を作成してくれます。 c.

大量資料（証拠）の加工およびアップロード戦略 (1) 証拠資料の「ワンファイル（One-File）」化: バラバラの内容証明、メール、PDFを一つのPDFに結合します。これはファイル数の制限（通常10～20個）を回避する最も確実な方法です。また、スキャンPDFは必ずOCR処理を行い、テキストが認識される状態でなければ、LLMが内容を正しく読み取ることができません。

(2) タイムラインプロンプトと資料の連結（マルチモーダル戦略）: 写真のような非テキスト証拠は、まず説明文を作成します。例：「証第1号証：2024. 01.

01. 現場写真 — 建物外壁の亀裂状態」。このような説明を別文書に整理してPDF化してアップロードすれば、AIが証拠の文脈を理解できます。

録音データの場合は、テキストに書き起こした後、LLMに「重要な発言を中心にタイムスタンプを付けて要約して」と依頼します。その要約文をプロジェクトの知識として活用します。(3)

NotebookLM + Claude/Gemini 協力プロセス: 容量制限がほとんどないNotebookLMを「データ倉庫」として使い、精巧な書面作成にはClaudeやChatGPTを使う方式です。

まず、NotebookLMに数百ページの事件記録全体をアップロードします。次に「この事件の事実関係を日付順に整理して」「被告の主張の中で矛盾する部分を証拠番号と共にリストアップして」と依頼してデータを抽出します。最後に、NotebookLMが整理してくれた核心的な要約テキストをコピーしてClaudeのプロジェクトに貼り付け、「この内容に基づいて答弁書の草案を作成して」と依頼します。

この3段階のワークフローにより、各ツールの強みを最大限に活用できます。

4. 助言実務での活用

a. 法律助言プロジェクトの設定 訴訟とは異なり、助言（アドバイザリー）業務には相手方の書面がなく、依頼者が提供した契約書や規定が中心資料となります。プロジェクト指示の例：「このプロジェクトはABC企業の個人情報保護法コンプライアンスに関する助言です。

日本の個人情報保護法とEUのGDPRを基準に分析してください。」 b. 具体的な活用シナリオ (1) 契約書の検討: 相手方から送られてきた契約書をアップロードし、「当方（依頼者）にとって不利な条項を特定し、修正案を提示して」と依頼します。

AIが不利な条項、曖昧な表現、漏れている保護条項などを体系的に分析してくれます。(2) 規制遵守チェックリスト: 特定の業界の規制要件をアップロードし、依頼者の現在の運営状況を説明すれば、遵守状況を項目別に点検するチェックリストを生成できます。(3) 法律意見書の作成: 複雑な法的争点についての意見書草案を作成する際、関連法令と判例をプロジェクトに入れておけば、根拠のある意見書を効率的に作成できます。

(4) M&Aデューデリジェンス (Due Diligence): 大量の契約書や財務諸表をアップロードし、リスク要因を自動的に特定させることができます。「この会社の契約書の中で Change of Control（支配権変更）条項があるものをすべて見つけて」といった具体的な検索が可能です。

5. 注意事項および倫理的考慮

a. AIの回答の限界の認識 LLMには「ハルシネーション（幻覚）」現象があります。存在しない判例を捏造したり、法令の条文を不正確に引用したりすることがあります。

AIが提示した判例番号や条文は、必ず原本と照らし合わせて確認しなければなりません。 b. 守秘義務 弁護士の守秘義務（韓国弁護士法第26条など）を考慮し、機密性の高い依頼者の情報を外部のAIにアップロードする際は慎重になる必要があります。

可能であれば個人識別情報を非識別化（仮名化）した上でアップロードすることが望ましいです。各AIサービスのデータ処理ポリシーを事前に確認し、有料プラン（データの学習への利用をオフにするオプションがあるもの）を使用することを推奨します。 c.

最終判断は弁護士の役割 AIはあくまで補助ツールです。法的な判断と戦略的な決定は、必ず弁護士が行わなければなりません。AIが提示した分析や草案は出発点であり、最終成果物ではありません。

弁護士の専門的な経験と直感が、依然として最も重要です。

[← 前の章](#)

[全章を見る](#)

[次の章 →](#)

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第7部 弁護士の契約助言業務におけるAI活用

← 前の章

全章を見る

次の章 →

第7部 弁護士の契約助言業務における人工知能の活用方法

1. 契約書の生成およびドラフト作成

a. 契約書ドラフトの迅速な生成：弁護士が契約書を一から作成するには、相当な時間と労力を要する。取引の種類、当事者の情報、核心的な条件（代金、期間、義務事項など）をAIに入力すれば、その取引に適した契約書のドラフトを数分以内に生成できる。

売買契約、業務委託契約、合弁投資契約など様々な類型に対応しており、業種別の特殊な条項まで反映させることが可能である。弁護士が白紙の状態から作成する時間を大幅に短縮し、検討と修正により多くの時間を投入できるようになる。[プロンプト例]「ソフトウェア開発業務委託契約書のドラフトを作成してください。

発注者はA株式会社、受託者はB株式会社であり、契約金額は5億円、開発期間は6ヶ月です。知的財産権は発注者に帰属し、瑕疵補修期間は1年と設定してください。大韓民国法を準拠法とし、紛争発生時はソウル中央地方裁判所を管轄裁判所に指定してください。

」 b. 秘密保持契約（NDA）の個別最適化された生成：取引の目的（投資検討、技術提携、M&Aの実査など）と当事者の関係に応じて最適化されたNDAを生成できる。一方的なNDAと相互的なNDAを区別し、秘密情報の定義範囲、有効期間、例外事由、返還および廃棄義務、違反時の救済手段などを取引の特性に合わせて調整する。

特に国際取引の場合、準拠法や管轄、輸出管理規制の遵守条項まで含め、実務ですぐに使用できるレベルの内容を提供する。

2. 危険探知およびリスク分析

a. 特殊条項（RED FLAG）の自動探知：契約書の全文をアップロードすると、AIが自動的に不利な条項、曖昧な損害賠償責任、一方的な解除権、競業禁止期間の不当な設定、更新拒絶の自由など、潜在的なリスク要因を識別して警告する。各特殊条項に対して深刻度を3段階（高、中、低）で提示し、該当する条項が実務でどのような問題を引き起こし得るかをシナリオと共に説明する。

大量の契約書にも素早く適用でき、複数の案件を同時に処理することができる。[プロンプト例]「添付した契約書を検討し、当方（乙）にとって不利な条項をすべて識別してください。各条項について リスク度（高/中/低）、 不利な理由、 修正勧告案を表形式で整理してください。

」 b. 欠落した必須条項の識別および追加：取引の種類ごとに必ず含まれるべき必須条項（不可抗力、紛争解決、準拠法、秘密保持、損害賠償限度など）が欠落していないか点検する。欠落している条

項があれば、その不在がどのような法的リスクをもたらすかを説明し、同時に追加すべき条項の文案まで提案する。

特に国内法および関連規定（電子商取引法、代理店法など）の要求事項も併せて点検し、法令違反のリスクを最小化する。c. 業務委託契約書のリスク分析：業務委託（アウトソーシング）契約で発生する固有のリスクを重点的に分析する。

委託範囲の曖昧さ、再委託の可否、下請け構成などの問題をはじめ、サービスレベル合意（SLA）の明確性、委託者の監督権限、受託者の損害賠償責任の範囲、個人情報の処理委託に関する事項、個人情報保護法および電子金融取引法など、規制ごとの要求事項の遵守状況などを体系的に点検する。d. 契約書の条項別解釈およびリスク評価：契約書の各条項を順番に分析し、該当する条項の法的意味、実質的な影響、潜在的なリスクを総合的に解釈・評価する。

単なる解釈を超えて、「この条項が紛争時にどのように作用するか」「相手方がこの条項をどのように活用し得るか」という観点から、実戦的なリスクを評価する。経営陣や非法律担当者に提供できるよう要約説明を添えることで、コミュニケーションの効率を高める。

3. 修正および交渉の支援

a. 相手方に有利な条項への修正案（Redlining）の提示：相手方が提示した契約書案から、相手方に一方的に有利な条項を識別し、具体的な修正案を文案と共に提示する。原文と修正案を対照して変更事項と変更理由を明示するため、相手方に修正依頼の論理的根拠を説明する際にそのまま活用できる。

特に英文契約書における微妙な表現の違い（Shall vs. May、Reasonable Efforts vs. Best Effortsなど）がもたらす法的効果の差を反映した、精密な修正案を提供する。

[プロンプト例]「添付した契約書から相手方（甲）に一方的に有利な条項を見つけてください。各条項について 原文、問題点、当方に有利な修正案を提示してください。修正案は交渉ですぐに使用できる完成された文案で作成してください。

」b. 模範例に基づく一貫した契約検討：会社の契約検討基準（プレイブック）を事前に設定し、すべての契約書を同一の基準で一括して検討する。例えば「損害賠償の限度は契約金額の100%を超えてはならない」「準拠法は必ず韓国法とする」「仲裁地はソウルとする」などの社内基準を登録すれば、検討対象の契約書がこの基準に適合しているかを自動的に判別する。

法務チームのリソースが不足している場合や、多数の契約を同時に検討しなければならない状況において、検討品質のばらつきを最小限に抑える。

4. 特殊条項の深層検討

a. 損害賠償・免責条項の妥当性検討：損害賠償条項の詳細（直接損害、間接損害、派生的損害、賠償限度（CAP）、免責事由、賠償請求期間など）が、取引の性格や規模に照らして妥当であるかを分析する。特に無過失責任、連帯責任の有無、免責条項の範囲が過度または不公正なケースを識別し、業界標準と比較して修正案を提示する。

予定された損害賠償額（Liquidated Damages）の有効性と違約罰（Penalty）との区別についても併せて検討する。b. 紛争解決条項（仲裁・管轄）の最適化に関する助言：訴訟と仲裁のどちらがその取引に適しているか、仲裁を選択する場合に最適な仲裁機関（ICC、SIAC、KCAB、LCIAなど）と仲裁地、仲裁言語、仲裁人の数をどのように設定するのが有利かを分析する。

相手方の国籍と取引規模を考慮し、紛争発生時に実質的に判定を執行できる管轄を推薦し、暫定的な保全処分（Interim Measures）の活用可能性まで検討する。c. 契約の更新・解除条件の分析：契約更新条項の類型（オプトアウト方式や自動更新の有無）、中途解約時の違約金の規模、解約通知期間の妥当性、解約後の残存義務などを分析する。

特に継続的契約（SaaS、保守、フランチャイズなど）における解除条件の適切さを深く点検する。d. ライセンス・知的財産権条項の検討：ライセンスの範囲（独占/非独占、地域、期間、用途）、二次的著作物作成権の帰属、ソースコード・エスクロー、第三者の知的財産権侵害時の免責（IP Indemnification）、特許登録前のライセンス効力の範囲などを検討する。

ソフトウェア開発委託や特許登録の有無に伴うIP帰属など、争点が複雑な事案においても、体系的な検討と代替案の提示が可能である。

5. 比較分析および情報の整理

a. 英文契約書の翻訳および法律用語の検証：英文契約書を韓国語に翻訳する際、または韓国語の契約書を英文に翻訳する際の法律用語の正確性を検証する。日常英語と法律英語の意味の違い（例：Considerationは「考慮」ではなく「約因」、Indemnifyは単なる「補償」ではなく「免責・補填」、約款法上の免責と契約法上の免責の区別など）を正確に反映させる。

単なる翻訳を超えて、両法体系間で概念の不一致がある部分については、調査結果と共に説明を提供する。[プロンプト例]「添付した英文契約書を韓国語に翻訳してください。法律用語は大韓民国の法律体系に合う正確な用語を使用し、英文原文の法的意味と韓国語訳で差異が生じ得る部分は、別途 [訳注] を付けて説明してください。」

」b. 標準契約書と検討対象契約書の比較分析：業界の標準契約書（FIDIC、SAJ Form、ISDA Master Agreement、公正取引委員会標準約款など）を基準に、検討対象の契約書の条項ごとの差異を分析する。標準より不利な条項、標準にはあるが検討対象の契約書では欠落している条項などを明確に識別する。

これにより、相手方が標準からどの程度逸脱しているかを把握し、交渉において「なぜ標準に合わせるべきか」を論理的・根拠を持って主張できる。c. 契約書要約テーブルの自動生成：長文の契約書から核心的な情報（当事者、契約目的、代金、支払条件、主要義務、履行期間、解除条件、損害賠償限度、準拠法、紛争解決方法など）を抽出し、一目で把握できるように要約テーブルを自動生成する。

複数の契約書を同時に管理しなければならない法務チームや経営陣にとって特に有用であり、契約ポートフォリオの条件比較や期限管理を効率化できる。[プロンプト例]「添付した3件の契約書を分析し、次の項目を基準に比較テーブルを作成してください：契約当事者、契約類型、契約金額、契約期間、自動更新の有無、解除条件、損害賠償限度、準拠法、紛争解決方法、秘密保持期間。」

6. 実務活用時の留意事項

AIが生成した契約書のドラフトや検討意見は、必ず弁護士の専門的な判断を経なければならない。AIは一般的な法理や標準的な契約慣行に基づいて結果を生成するが、個別取引の固有の事情、当事者間の交渉経過、業界特有の慣行などは弁護士だけが総合的に判断できるものである。AIは弁護士の業務を代替するものではなく、反復的で時間を要する作業を自動化することで、弁護士がより付加価値の高い法律判断や戦略的な助言に集中できるよう支援するツールとして活用すべきである。

[← 前の章](#)

[全章を見る](#)

[次の章 →](#)

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第8部 AI生成物のファクトチェック

← 前の章

全章を見る

次の章 →

第8部 AI生成物に対するファクトチェック

弁護士の実務において、人工知能は契約書の検討、判例調査、法律意見書の作成など、様々な領域で強力な補助ツールとして定着している。しかし、AIが生成した結果をそのまま依頼人に提供したり、法律文書に反映させたりすることは、深刻な職業倫理違反や法的責任の問題につながる恐れがある。弁護士がAIを活用する際に必ず伴わなければならないプロセスこそが、ファクトチェックである。

1. ファクトチェック専用ツールの活用

AIが生成した法律的意見や判例引用の正確性を検証する際は、Felo AIやPerplexity AIのような検索ベースのAIツールを活用するのが効果的だ。これらのツールはリアルタイムのウェブ検索に基づいて出典を併せて提示するため、ChatGPTやClaudeが生成した回答の真偽をクロスチェックする用途に適している。例えば、AIが特定の判例を引用した場合、Perplexityで該当する事件番号と判示事項を再確認するといった具合だ。法律分野では、一つの誤りが訴訟戦略全体を揺るがしかねないため、必ず複数の経路で検証する習慣が必要である。

2. 疑わしい箇所の選別検証

AIが回答した内容のすべてを一つひとつ検証することは、現実的に困難である。効率的なファクトチェックの核心は、疑わしい箇所を選別して集中的に検証することだ。弁護士として長年の実務経験があれば、直感的に「この部分は正しいのか？」という感覚が働くはずであり、その部分を抜粋して個別にファクトチェックを行うべきである。具体的には、AIが引用した法条文の条項番号、判例の実在の有無と判示内容の正確性、施行日、改正の有無などが主な検証対象となる。特にAIは、実在しない判例をあたかも存在するように生成する場合があるため、細心の注意が必要だ。

3. ハルシネーションと学習データの誤り

現在の最新AIモデルであっても、約2%前後のハルシネーション（幻覚現象）が存在する。これは、AIが事実ではない情報をあたかも事実であるかのように自信を持って記述する現象である。さらに、AIの学習データそのものに、人間が検品する過程で混入した誤りが含まれている可能性もある。つまり、AIが誤った答えを出す原因は、モデルの生成ミスだけでなく、学習資料の根本的な不正確さに起因する場合もあることを認識しなければならない。法律分野において2%の誤りは決して小さな数値ではない。100件の法律相談のうち2件に誤った情報が含まれる可能性があることを意味するからだ。

4. AI盲信の警戒と主体性の維持

AIを繰り返し使えば使うほど、その利便性に慣れ、自然とAIの回答を盲信する傾向が生じる。最初
は入念に検証していた弁護士も、時間が経つにつれて「AIが間違えるはずがない」という無意識の
信頼が形成される。これこそが最も危険なポイントである。法律業務の 最終的な責任は常に弁護士
にあり、AIはあくまで補助ツールに過ぎない。自分が判断の中心であり、AIはその判断を助ける手
段であるという認識を失わないことが重要だ。AIがいかに精巧になろうとも、依頼人固有の状況、
裁判所の傾向、相手方代理人の戦略といった文脈的な判断は、経験豊富な弁護士にしかできない。
結局、AI時代の有能な弁護士とは、AIをうまく活用しながらもAIに従属しない弁護士である。ファ
クトチェックは、そのバランスを維持するための最も基本的かつ核心的な実践である。

[← 前の章](#)

[全章を見る](#)

[次の章 →](#)

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第9部 LLMが提供するディープリサーチ機能

← 前の章

全章を見る

次の章 →

近年、主要なAIサービスが競って導入しているディープリサーチ（Deep Research）機能は、弁護士実務の調査および分析領域に革新的な変化をもたらしている。ディープリサーチとは、AIが単に一つの質問に対して一つの回答を出すのではなく、膨大な情報を自動的に検索・分析し、包括的な結果を提供する機能のことである。自動化された文献調査とデータ統合が行われ、特定のテーマについて深層的に探究することで、断片的な検索では到達しにくい深みのあるインサイト（洞察）を導き出す。

ディープリサーチが生成するレポートは、平均10ページから30ページに及ぶ相当な分量の情報を含んでいる。レポートの構成要素には、テーマの概要、主要な争点に関する分析、多様なソースから抽出されたインサイト、そして参考文献リストが含まれる。フォーマットの多様性も特徴であり、学術論文スタイルのレポートからビジネスの意思決定のための実務レポート、技術動向分析レポートまで、目的に応じた形態で成果物を提供する。

弁護士実務におけるディープリサーチの効用は非常に大きい。まず時間効率の面で、従来手作業で行っていた調査時間を画期的に短縮する。例えば、特定の産業分野の規制状況を把握するために数日かかっていた作業を、数十分以内に完了させることができる。

また、包括的な分析が可能であり、一つのテーマに対して多様な視点を同時に提示する。契約紛争において、国内の判例だけでなく、海外の類似事例、学術的な議論、業界の慣行までを一括して俯瞰することができる。データに基づいた意思決定を支援することも利点である。

勘に頼っていた判断を客観的なデータと統計で裏付けることができ、最新のトレンドや研究動向をリアルタイムで統合してレポートに反映させる。現在、ディープリサーチ機能を提供している代表的なAIサービスには、GoogleのGemini、OpenAIのChatGPT、そしてPerplexityなどがある。Geminiは「Deep Research」という名称で、Google検索エンジンと連動した強力なウェブベースの調査機能を提供している。

ChatGPTはGPT-5ベースの多様なモード（Auto、Instant、Thinking、Proなど）を通じて、ユーザーが調査の深さと速度を選択できるようにしている。特にProモードはリサーチ級のインテリジェンスを標榜し、最も深層的な分析を提供する。Perplexityは検索特化型AIとして出典を明示することが強みであり、法律調査において根拠資料の追跡が容易である。

弁護士がディープリサーチを活用する際には、質問の設計が重要である。「この契約書を検討して」といった漠然とした依頼よりも、「国内のソフトウェア開発業務委託契約における知的財産権の帰属に関して、最近5年間の最高裁の判例動向と業界の標準的な契約慣行を比較分析して」といった、具体的で範囲が明確な質問を投げかけることで、質の高いレポートを得ることができる。ディープリサーチの成果物も同様に、前述したファクトチェックのプロセスを経なければならないのは言う

までもない。

ディープリサーチは弁護士の調査能力を代替するものではなく、増幅させるツールであり、これを巧みに活用する弁護士こそがAI時代の競争力を備えることになるだろう。

[← 前の章](#)

[全章を見る](#)

[次の章 →](#)

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第10部 Google検索URLとYouTube検索URLをAIに作らせる

← 前の章

全章を見る

次の章 →

第10部 Google検索URL、YouTube検索URLの作成を依頼する

弁護士が特定の法的争点について調査を開始する際、最初に行うのは検索である。しかし、一つの事件を調査するためには、関連する判例、学説、法令の改正動向、類似事件の報道、専門家の解説動画など、複数のキーワードで繰り返し検索を行う必要がある。この過程でかなりの時間が消費されるが、AIに検索URL自体の作成を依頼すれば、この作業を画期的に短縮できる。

Google検索URLとは、Googleで特定のキーワードを検索した際にブラウザのアドレスバーに表示されるアドレスのことだ。例えば、「損害賠償予定額の減額」をGoogleで検索すると、「
`https://www.google.`

`com/search? q=損害賠償+予定額+減額`」というURLが生成される。YouTube検索URLも同様に、「
`https://www.`

`youtube.com/results? search_query=損害賠償+予定額+減額`」という形式になる。

AIにこれらのURLを一括で作成するよう依頼すれば、弁護士はクリッカー一つでそれぞれの検索結果ページに直接アクセスできる。実務での活用法は次の通りだ。例えば、ソフトウェア開発委託契約の紛争を担当したと仮定しよう。

この事件を調査するためには、瑕疵修補責任、知的財産権の帰属、開発遅延の損害賠償、検収基準など、複数の争点を同時に把握する必要がある。この時、AIに次のように依頼することができる。
[プロンプト例1 - Google検索URLの生成]「ソフトウェア開発委託契約の紛争に関連して、次のテーマ別にGoogle検索URLを作成してください： ソフトウェア瑕疵修補責任の判例、 委託契約の知的財産権の帰属（最高裁判所）、 開発遅延の損害賠償算定基準、 ソフトウェア検収完了の法的効力、 委託契約の中途解約による違約金の判例。

各URLをクリック可能なリンクとしてまとめてください。」[プロンプト例2 - YouTube検索URLの生成]「次の法律テーマに関するYouTube検索URLを作成してください： 契約書の損害賠償条項の解説、 ソフトウェア紛争の事例、 委託契約のチェックポイント（弁護士による講義）、 IT契約の法的リスク。それぞれクリックするとすぐにYouTubeの検索結果に移動するリンクを作成してください。

」このように生成されたURLリストは、さまざまな方法で活用できる。まず、GrabbittのようなChrome拡張機能を活用すれば、効率が倍増する。マウスの右ボタンを押したままドラッグして複数のリンクを一括選択し、新しいタブで同時に開くことができ、Zキーを押しながら左マウスドラッグでリンクアドレスを一括コピーすることもできる。

10個の検索URLを一度に開き、各タブで結果をざっと確認すれば、個別に検索語を入力してエンターキーを押す反復作業に比べて、体感時間は大幅に短縮される。この方法は単なる便宜機能を超えて、調査の体系性を高める効果もある。AIにURL生成を依頼する過程で、自然に調査すべき争点が整理され、見落としている検索テーマがないかAIと一緒に点検できるからだ。

複雑なM&A取引や国際契約の紛争のように、調査範囲が広い事件ほど、この方式の効用は大きくなる。AIを単なる回答生成器ではなく、調査設計のパートナーとして活用することが鍵である。

[← 前の章](#)

[全章を見る](#)

[次の章 →](#)

[弁護士](#) ・ [元国会議員](#) ・ [AI政策研究者](#)

[kimkj.com](#)

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第11部 NotebookLMとGrabbitによる大規模法律資料分析

← 前の章

全章を見る

次の章 →

第11部 大規模法律資料分析のためのNotebookLMとGrabbit活用法

1 NotebookLMの定義と弁護士業務における中核機能

NotebookLMは、Googleが開発したAIベースのリサーチおよび個人用ナレッジベースツールです。Googleの最新AIモデルであるGeminiをベースに動作し、一般的なチャットボット（ChatGPTやClaudeなど）とは根本的に異なる特性を持っています。ここでLMは「Language Model」の略であり、LLM（Large Language Model）とは区別されます。

NotebookLMの最大の特徴は、ユーザーが直接アップロードした資料のみを根拠に回答する点にあります。一般的なチャットボットがインターネット全体から学習した膨大なデータに基づいて回答するのに対し、NotebookLMはユーザーが提供したソースドキュメントの範囲内でのみ回答します。これは法律実務において非常に重要な意味を持ちます。

弁護士が特定の事件に関連する資料だけを投入すれば、AIはその資料の範囲内でのみ分析・回答するため、無関係な情報が混ざるリスクがありません。NotebookLMでは、1つのノートに最大300個のファイルをソースとして追加できます。PDFファイル、テキストドキュメント、ウェブサイトのURL、YouTube動画のスクリプトなど、多様な形式の資料をソースとしてアップロードでき、多言語の資料が混在していても問題ありません。

外国語の資料をソースにしても、日本語で理解し整理してくれます。弁護士事務所では、特定の事件に関連する数百ページの準備書面、証拠資料、関連判例、法令条文などをソースとして入力し、一種の「デジタル事件ファイル」として活用できます。例えば、学校暴力に関連する損害賠償訴訟を進める場合、数十件の関連判例、学校暴力予防法全文、教育部のガイドライン、医学的診断書などをすべて1つのノートに入れ、統合分析を依頼することができます。

特に、回答の根拠となったドキュメントの特定のページを引用（Citation）として提示するため、情報の信頼性が非常に高いです。「この内容は○番目のソースの○ページにあります」と出典を明確に表示してくれるので、弁護士が原文を直接確認・検証するのが容易です。NotebookLMの主な出力機能には、音声ポッドキャストの生成、要約の作成、ビデオ生成、体系的な整理などがあります。

文献調査に基づいた論文、記事、書籍を執筆する際に特に有用であり、NotebookLMで生成された内容をClaudeに文章の推敲を依頼すれば、よりスムーズで読みやすい文章に仕上がります。

2 ChromeブラウザおよびGrabbit拡張機能のインストールと設定方法

NotebookLMに大規模なウェブ資料を効率的に収集して投入するためには、2つのツールが必要です。Google ChromeブラウザとGrabbit Chrome拡張機能です。まず、Google Chromeブラウザをイン

ストールします。

ChromeはGoogleエコシステムの中核を成すブラウザであり、NotebookLMやGeminiなどのGoogle AIツールとの連携が最もスムーズです。すでにChromeを使用している場合は、最新バージョンにアップデートされているか確認してください。Grabbit拡張機能のインストール方法は次の通りです。

Chromeブラウザを開き、アドレスバーに「chrome.google.com/webstore」と入力してChromeウェブストアにアクセスします。

検索窓に「Grabbit」または「Grab it」と入力して、該当する拡張機能を探します。「Chromeに追加」ボタンをクリックすればインストールは完了です。インストール後は、Chromeブラウザ右上のパズル型のアイコン（拡張機能の管理）をクリックします。

拡張機能リストの中からGrabbitの隣にあるピン（Pin）アイコンを押して固定します。これにより、ブラウザ上部のツールバーにGrabbitアイコンが常に表示され、いつでもすぐに使用できるようになります。Grabbitは、ウェブページのテキストコンテンツをワンクリックで抽出してコピーしたり、ファイルとして保存したりできるツールです。

ウェブで収集した資料をNotebookLMやClaudeのようなAIツールに直接渡せるように助ける架け橋の役割を果たします。Grabbitの核心機能の1つは、複数リンクの一括処理です。ウェブページに複数のリンクが並んでいる際、マウスの右ボタンを押したままドラッグすると、複数のリンクを一度に選択して新しいタブで開くことができます。

また、Zキーを押しながらマウスの左ボタンでドラッグすると、選択したリンクのURLを一括コピーできます。この機能は、大規模な資料収集作業において時間を画期的に短縮してくれます。

3 人工知能を活用したGoogleおよびYouTube検索用URLリストの作成方法

弁護士業務において特定のテーマに関する膨大な資料を収集する場合、一つひとつ検索ワードを入力して結果を確認するのは非常に非効率的です。この際、GeminiやClaudeなどのAIに検索結果のURLリストを作成するよう依頼すれば、資料収集の時間を劇的に短縮できます。Google検索URL生成依頼の例を見てみましょう。

AIに次のように依頼します。「最近3年間に言い渡された『学校暴力の加害生徒に対する懲戒処分取消訴訟』に関連する主要な判例のGoogle検索結果URLを10個、リスト形式で作成して」。AIはGoogle検索エンジンの検索演算子やルールを活用し、クリックすれば直接その検索結果ページに移動できるURLリストを生成してくれます。

YouTube検索URLの生成も同様です。「YouTubeで『不動産競売の法律相談』に関する最新動画の検索結果URLを10個作成して」と依頼したり、特定のYouTubeチャンネル内の関連動画URLを抽出するよう依頼したりできます。YouTube動画の場合、NotebookLMがその動画のスクリプト（字幕）を自動的に抽出してソースとして活用するため、動画の内容までテキストベースで分析できます。

より精巧な検索のために、AIに高度な検索演算子を活用したURLを依頼することも可能です。例えば、特定の法律情報サイトのみから検索するように「site:」演算子を含めたり、特定の期間内の結

果のみを表示するように日付範囲を指定したりすることもできます。AIに「最高裁判所の判例検索サイトで『詐欺罪の無罪判決』に関する最近2年間の判例検索URLを作成して」のように具体的に依頼すれば、より正確な結果を得ることができます。

このように生成されたURLリストはテキスト形式で提供されるため、これをコピーしてChromeブラウザで活用すればよいのです。

4 Grabbitを利用した大規模資料収集およびNotebookLMソースの一括登録プロセス

AIが生成したURLリストを受け取ったら、次はGrabbitを活用して実際の資料を大規模に収集し、NotebookLMに一括登録する段階に進みます。このプロセスは、弁護士業務において最も時間が節約される核心的なステップです。最初のステップは、URLリストをChromeブラウザで開くことです。

AIが生成したURLリストをウェブページに表示したりドキュメントに貼り付けたりすれば、Grabbitの複数リンク選択機能を活用して、複数のリンクをまとめて新しいタブで開くことができます。マウスの右ボタンを押したままドラッグして目的のリンクを選択し、「新しいタブで開く」を実行します。あるいは、Zキーを押した状態でマウスの左ドラッグによりリンク先URLを一括コピーすることも可能です。

2番目のステップは、各ウェブページの内容をGrabbitで抽出することです。開いた各タブでGrabbit拡張機能のアイコンをクリックすると、そのページの主要なテキストが自動的に抽出されます。Grabbitは広告、メニュー、サイドバーなどの不要な要素を除去し、本文のテキストだけをきれいに抽出してくれます。

3番目のステップは、抽出された資料をNotebookLMに一括アップロードすることです。Grabbitで抽出したテキストをコピーするかファイルとして保存した後、NotebookLMの「ソース (Sources)」ウィンドウにドラッグ&ドロップで一括アップロードします。PDFファイルの場合は、別途変換することなくそのままソースとしてアップロードできます。

ウェブサイトのURL自体を直接ソースとして登録することも可能です。NotebookLMは1つのノートに最大300個のソースを登録できるため、散らばっていた判例、法令、学術論文、ニュース記事などを1つの分析単位として統合できます。このようにソースが登録されると、NotebookLMは資料全体を読み込み理解した上で、その資料の範囲内で質問に回答します。

画像が含まれる資料の場合には注意が必要です。NotebookLMはテキストベースで動作するため、画像が重要となる資料はNano Bananaのような画像生成・処理ツールで別途処理し、テキスト部分だけをNotebookLMに入れて活用するのが効果的です。

5 Google GeminiとNotebookLMの連携および専門報告書作成ワークフロー

NotebookLMに資料をすべて登録し、基本的な分析を終えたら、次はGoogle Geminiと連携して、より高度な分析と報告書作成へと進むことができます。また、Google Gemsも併せて活用できます。Google GeminiでNotebookLMを連携させる方法は次の通りです。

Google Gemini (gemini.google.com) にアクセスした後、設定メニューで「Google Workspace 拡張機能」を探して有効にします。

拡張機能リストの中のNotebookLMに関する権限を許可します。この設定が完了すると、Geminiのチャット欄で「@NotebookLM」と入力することで、特定のノートの内容を読み込んで直接質問できるようになります。弁護士業務のためのAIツール別の役割分担は、次のように整理されます。

基本資料の収集・蓄積はNotebookLMで行います。数百件の判例、法令、証拠資料を1つのノートにまとめ、統合分析の基盤を作ります。資料調査と深化分析はGoogle Geminiで行います。

NotebookLMで整理された内容に基づき、追加的な法理分析、判例比較、争点整理などを進めます。最終原稿と執筆はClaudeで行います。GeminiとNotebookLMで分析された内容をClaudeに投入し、文章をよりスムーズで説得力のあるものに校正して最終報告書を完成させます。

SNS投稿の作成もClaudeを活用すると効果的です。具体的な報告書作成ワークフローを例に説明します。まず、NotebookLMで分析するテーマに関連するすべての資料をソースとして登録します。

次に、NotebookLMに報告書の目次と詳細目次を作成するよう依頼します。目次が確定したら、各詳細目次のキーワードに該当する項目について記述を依頼します。この際、分量の調節が重要ですが、1ページはおよそ1,000文字程度なので、5ページの報告書を作成したい場合は5,000文字程度で作成を依頼します。

NotebookLMが草案を作成したら、それをGoogle Geminiに持ち込み、ファクトチェックと追加分析を行います。最終的にClaudeに入れて、弁論要旨書、意見書、報告書などの適切な文体に整えて完成させます。このような3段階のワークフロー（NotebookLM → Gemini → Claude）を通じて、従来は数日かかっていた大規模な法律資料分析と専門報告書の作成を数時間以内に完了させることができます。

6 実践活用のための全体ワークフローの要約

弁護士事務所においてAIを活用した業務全体の流れを整理すると、次のようになります。第一に、特定テーマに関する資料収集段階です。GeminiやClaudeにGoogle検索URLまたはYouTube検索URLリストの作成を依頼します。

第二に、ChromeブラウザとGrabbitを活用して生成されたURLを開き、ウェブページのテキストを一括抽出してNotebookLMのソースとして大量登録します。第三に、GeminiとNotebookLMを連携させて深化分析を遂行します。NotebookLMがソース資料の範囲内で草案を作成し、Geminiがこれを補完します。

第四に、必要な分析書を作成します。目次の策定、詳細な記述、分量の調節などをNotebookLMとGeminiを通じて進めます。第五に、Claudeを活用して流麗な最終報告書や討論資料を作成します。

文章の自然さと説得力を高める仕上げ作業を行います。第六に、画像関連の資料はNano Bananaなどの画像処理ツールで別途処理し、NotebookLMにはテキスト部分だけを入れて活用します。このワークフローを習得すれば、弁護士事務所では人工知能の助けを借りて大規模な法律資料を体系的に分析し、専門性の高い報告書を効率的に作成できるようになります。

[← 前の章](#)

[全章を見る](#)

[次の章 →](#)

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第12部 プロンプト作成が難しく感じる時

← 前の章

全章を見る

次の章 →

プロンプトを難しく考えないでください。プロンプトを上手く書かなければならないという言葉にプレッシャーを感じる方が多いです。「プロンプトエンジニアリング」という大げさな用語まで登場するので、まるで特別な技術が必要ないように感じられることもあります。

しかし、真実はこうです。友達にお願いするように話せばいいのです。カフェで友達に「今度引っ越すんだけど、荷物が多くてエレベーターがないから心配なんだ。

費用は50万ウォンくらいを考えていて、土曜日にできればいいんだけど、いい業者あるかな？」と話すように、AIにもただあれこれと状況を説明すればいいのです。核心はたった一つです。

具体的かつ詳細に話すこと。頭に浮かぶままに希望事項や条件を伝えれば、AIが自然に整理してくれます。完璧な文章である必要も、体系的である必要もありません。

むしろ、とりとめなくあれこれ付け加える方が、短くスッキリとした一行よりもはるかに良い結果を生み出します。例えば、このように短く書くと→「旅行の計画を立てて」。一方で、このように詳しく書くと→「来週の木曜日から日曜日まで3泊4日で釜山旅行に行こうと思っているんだ。

60代の両親と一緒に行くんだけど、父が膝が悪くなくてたくさん歩くのは大変なんだ。海鮮が好きで、海が見えるカフェのような場所で休むのが好きなんだ。宿は海雲台の近くがいいし、一日に二箇所以上は無理だ。

予算は宿泊費込みで100万ウォンくらい」。二つ目の方が圧倒的に良い回答を引き出せます。特別な技術ではありません。

ただ伝えたいことが多かっただけです。言葉で説明するのが難しければ、写真を見せてください。プロンプトが本当に輝く瞬間は、文章の代わりに写真を活用するときです。

百の言葉での説明より、一枚の写真の方が正確です。動画を作りたいとき — 頭の中にある動画の雰囲気を言葉で説明しようとする途方に暮れます。そんな時は、似た感じの動画や写真を探してスクリーンショットを撮り、AIに見せながら「こんな雰囲気で作りたい」と言えばいいのです。

長い動画なら、最初、中間、最後の部分から3～5枚ほどスクリーンショットをキャプチャして一緒に入れてください。AIが動画の流れと雰囲気を把握して、適切なプロンプトを作成してくれます。絵や画像を作りたいとき — 「幻想的な雰囲気の森の絵」と書くよりも、気に入った絵や写真のスクリーンショットを添えて「こんなスタイルで作って」と言えば、理想の結果にはるかに近づきます。

料理について知りたいとき — レストランで美味しい料理が出てきたけれど名前がわからないとき、あるいは冷蔵庫にある材料で何を作るか悩んでいるとき。ただ写真を一枚撮ってAIに見せてくださ

い。「これが何か教えて。

材料と作り方も教えて」と言えば完了です。 レストランのメニューを撮っておすすめを聞くこともできますし、冷蔵庫の中を撮って「これで何が作れる？」と聞くこともできます。

プロンプトの秘密は、結局これです。「自分が何を求めているのか」を自分自身が具体的に把握すること。そして、それを伝える最も簡単な方法を選ぶこと。

言葉で説明できるなら詳しく話し、言葉で難しければ写真を見せればいいのです。 コマンドを覚える必要はありません。 気楽に、詳細に、望むことを伝えてみてください。

← 前の章

全章を見る

次の章 →

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

第13部 その他知っておくと便利な使い方

← 前の章

全章を見る

次の章 →

1. 音声・口述によるAI文書作成

AIの音声入力機能を活用して文書を作成する方法を紹介するスライドです。核となるのは、散らばった思考を言葉に出せば、AIが一目瞭然に整理してくれるという点です。口述・音声入力を日記、起案書、公文書、手紙、書籍、ブログなど、多様な形式に変換できると説明しています。具体的な活用法として、イヤホンを着用してAIの音声会話モードをオンにし、ウォーキングをしながら構想内容を自由に話せば、30分で企画案が完成するという3段階のプロセスを提示しています。主要キーワードは、音声入力、AI整理、マルチタスク、時間節約、形式変換、効率性です。

2. 記憶想起型AI活用法 7選

「あれだよ、名前は思い出せないんだけど…」という日常的な場面でのAI活用法を紹介します。薬の名前、映画のタイトル、曲名、グルメ店の名前、機能名、昔のお菓子など7つのカテゴリーにおいて、正確な名前が思い出せなくても、断片的な記憶だけでAIに説明すれば正解を見つけてくれるという内容です。例えば「白くて硬い錠剤、赤いパッケージ」と言えばタイレノールを、「ディカプリオ、夢の中の夢」と言えばインセプションを見つけてくれます。主要なメッセージは、頭の中の曖昧な記憶をそのまま伝えるだけで、AIが残りを補ってくれるということです。

3. スケジュールの競合を解決する万能スケジューラー

複数のチームメンバーの複雑なスケジュールを調整し、共通の会議時間を見つけるAI活用のシナリオです。キム・ギョンジン、パク・ジヨン開発チーム長、イ・ミンホ・デザインリード、チェ・スジョンPMなど4人の異なる空き時間と制約条件（昼休み、経営陣会議、火曜午後の全体会議欠席など）が与えられます。これに基づき、来週（2025年10月6～10日）の中で2時間の午前会議の時間を見つけ、可能な3つのオプションを優先順位別に提示し、各オプションのメリット・デメリットの説明とともに、Googleカレンダーの招待状の草案および会議室予約のリクエストメッセージまで作成させるという複合的なリクエストです。

← 前の章

全章を見る

次の章 →

弁護士・元国会議員・AI政策研究者

kimkj.com

第14部 図解とAIインフォグラフィック

← 前の章

全章を見る

アップロードされた画像は、Nano Banana Pro（ナノ・バナナ・プロ）の画像編集活用事例（ポート写真の生成、プロフィール画像の変更）を示すスライドです。これらの内容とともに、NotebookLMのインフォグラフィック機能について総合的に説明いたします。

1. NotebookLMのインフォグラフィック機能とは

Google NotebookLMは、Gemini 3とNano Banana Proモデルをベースに、ユーザーがアップロードしたノート、PDF、研究資料をプロフェッショナルレベルのインフォグラフィックやスライドデッキに変換する機能を提供します。2025年11月に正式リリースされたこの機能は、NotebookLMを受動的な研究アシスタントから能動的なコンテンツ制作エンジンへと転換させた根本的な変化であると評価されています。別途のデザインツール（Canva、PowerPointなど）を使わずに、AIがソース資料の重要事項を自動的に抽出して視覚的に整理してくれます。

2. Nano Banana Pro

Nano Banana Pro（Gemini 3 Pro Image）は、Googleの最新画像生成・編集モデルで、2025年11月20日に公式リリースされました。既存のAI画像生成モデル（Midjourney、DALL-Eなど）との最大の違いは、Gemini 3 Proというマルチモーダル大規模言語モデルの上に構築されているため、画像内のテキストを実際に「理解」してレンダリングする点にあります。そのおかげで、多言語テキスト（韓国語を含む）を正確に表現でき、インフォグラフィックに含まれるラベル、タイトル、注釈が読みやすく生成されます。

NotebookLMでインフォグラフィックを生成する手順は簡単です。既存のノートブックを開くか新しく作成してソースをアップロードした後、スタジオ（Studio）パネルで「インフォグラフィック」を選択するだけです。2つの方式があり、1つ目はボタンをクリックするだけでAIが最適な形で自動生成するワンショット（One-shot）方式、2つ目は編集ボタンを押してスタイルガイドラインにアクセスし、出力言語、詳細度、方向（横/縦）などをカスタマイズする方式です。

生成には通常2～5分かかり、その間も他の作業を続けることができます。横向き（16:9）はLinkedInの投稿、ブログのヘッダー、メールキャンペーンに適しており、縦向き（9:16）はInstagramのストーリー、TikTokのコンテンツ、モバイル視聴に最適化されています。代表的な活用シナリオとしては、研究論文の主要フレームワークの視覚化、長文レポートの1枚要約、教育用の概念説明インフォグラフィック、データ視覚化などがあります。

画像ソース（スクリーンショット、チャート、写真など）をアップロードし、AIがそれらを総合して要約インフォグラフィックを作成することも可能です。インフォグラフィックが1枚の視覚的な要約であるのに対し、スライドデッキはソース全体を完全なプレゼンテーションに変換してくれる機能です。NotebookLMでスライドデッキを作成する際は、Nano Banana Proの視覚的能力とNotebookLM自体の創作エージェントが組み合わさって動作します。

独立型の詳細スライドとTEDスタイルの発表者用スライドから選択でき、ブランドスタイリングの適用、データのメタファー視覚化、漫画スタイル変換など、多様な表現が可能です。アップロードされた画像は、Nano Banana Proの画像編集機能を示す事例です。最初のスライド「パスポート写真の生成」は、一般の写真をパスポート規格に合わせて補正する事例です。

プロンプトは「この写真をパスポート規格に合わせて補正して。正面を向くようにし、両耳がはっきりと見えるようにして。表情は自然な無表情に変更して」というもので、本来見えていない耳を生成したり、表情まで変更したりするレベルの編集が可能です。

2枚目・3枚目のスライド「プロフィール画像の変更」は、スマートフォンでラフに撮影した写真を、専門のスタジオで撮影したようなプロフィール画像に変換する事例です。プロンプトで顎のラインの補正、肩のラインの調整、背景をパステルカラーの単色に変更するなど、細かな編集を指示しています。これは、Nano Banana Proが単なる画像生成を超えて、既存写真の精密な編集まで可能であることを示しています。

効果的なインフォグラフィック・プロンプトを作成する際は、いくつかの重要な要素を含めるのが良いでしょう。対象読者、カラーテーマ、情報の階層構造、スタイルの方針を明示すれば、より精巧な結果が得られます。例えば、「清潔感のあるビジネスに適したカラーテーマを使用して、AIが職場をどのように変えるかを要約するインフォグラフィックをデザインして。

3つの軸を強調して」というように具体的に作成するのが効果的です。ノートブックレベルでペルソナを設定（設定アイコン → ノートブックの構成）すると、スタジオの出力にも約75%程度影響を与えます。

無料・有料版の違いと制限事項

無料アカウントは、ノートブックごとに作成できる動画、スライドデッキ、インフォグラフィックの数に利用制限があります。Google One AI プレミアム・サブスクリプション（月額19.99ドル）に加入すると、より高い割り当てを受けることができます。また、インフォグラフィックはAIによって生成されたものであるため、視覚的または事実に基づかない不正確な内容が含まれる可能性があり、必ず人間が確認する必要があります。生成されたインフォグラフィックはPNGファイルとしてダウンロードでき、共有リンクを介した配布も可能ですが、画像形式であるため、個々の要素の編集は不可能です。

結びに代えて

この本の原稿を書き上げている間にも、AI技術は絶え間なく進化しました。執筆を始めたときには不可能だった機能が、脱稿の頃にはすでに商用化されており、初稿で「未来の可能性」として叙述した内容を「現在の現実」へと修正する作業が繰り返されました。このスピード感そのものが、法律家たちがAIを無視できない理由を雄弁に物語っています。

振り返ってみれば、私が1995年に検事として初めて任官した当時、判例検索は分厚い判例集を一枚一枚めくる作業でした。法令の改正履歴を追うには官報を調べなければならず、数千ページに及ぶ捜査記録の核心を把握することは、ひたすら時間と体力の問題でした。それから30年、世界は完全に変わりました。

今や私たちは、自然言語で質問を投げれば、数万件の判例から最も類似した先例を探し出し、数百ページの契約書からリスク条項を特定し、複雑に絡み合った事実関係をタイムラインとして整理してくれるツールを手にしています。しかし、AIがいかに精巧になろうとも、依頼人と向き合い、事件の文脈を理解するのは弁護士の役割です。冷徹な法理の裏に隠された当事者の切実さを読み取ること、勝訴の可能性という数値の先にある人間的な解決を模索すること、法律家としての倫理的判断を下すことは、いかなるアルゴリズムも代行できません。

AIは私たちの時間を生み出してくれるツールであり、その生み出した時間をどこに使うかは、全面的に私たちの選択にかかっています。私は、その時間がより深い法理研究、より細やかな依頼人への相談、より創造的な紛争解決戦略に使われることを願っています。実務的なアドバイスも付け加えたいと思います。

AIを初めて活用する際は、必ず小さな業務から始めることをお勧めします。簡単な判例要約や議事録の整理など、成果物を容易に検証できる領域で十分に感覚を掴んだ後、徐々に書面の草案作成や証拠分析といった難易度の高い業務へと範囲を広げていくのが安全です。そして、いかなる場合もAIの産出物をそのまま提出してはいけません。

必ず自身の専門的な判断で検討・修正し、責任を持てる範囲内で活用すべきです。これがAI時代の法律家の基本姿勢です。この本が出版されるまで、多くの方々の助けがありました。

実務現場の生々しい事例とフィードバックを惜しみなく提供してくれた同僚弁護士たち、技術的な検証に力を貸してくれたAI専門家たち、そして法律と技術の交差点で常に新しい問いを投げかけてくれた読者の皆様に深く感謝いたします。法は社会の最後の安全網であり、法律家はその安全網を織りなす者です。AIという新しい糸が、私たちの織りなす網をより緻密で、より堅固なものにしてくれると信じています。

この本がその始まりの一助となることを心より願っています。金慶珍 法律実務と人工知能 電子書籍発行 | 2026年2月25日 著者 | 金慶珍 発行人 | 金慶珍 発行所 | 金慶珍弁護士出版社 出版社登録 | 2025. 3.

10. (第2025-000015号) 住所 | ソウル特別市東大門区全農路91、白日ビル304号 電話 | 02-6338-1905 メール | kimkj008@gmail. com ISBN | 979-11-24360-05-7 価格 : 15,000ウォン 金慶珍 2026 本書は著作権者の知的財産であり、無断転載および複製を禁じます。

備考) 本書内の写真・画像・グラフは、人工知能を活用して生成されました。文章の内容の一部も、人工知能の助けを借りて作成されました。

← 前の章

全章を見る

弁護士 ・ 元国会議員 ・ AI政策研究者

kimkj.com

© 2026 Kim Kyung-jin. All rights reserved.

このAI書籍を応援する

この本が役に立った場合は、今後の翻訳、公開版、
AI知識プロジェクトをPayPalで応援できます。



PayPal

<https://paypal.me/kimkjkj>

QRコードを読み取るか、上のリンクを開いてください。